倉部

1990

石川県立埋蔵文化財センター

倉　　部

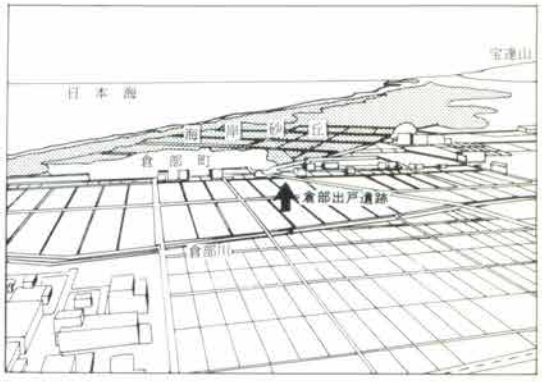
県営圃場整備事業旭第２地区倉部工区に係る
竹松遺跡・倉部出戸遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書

1990

石川県立埋蔵文化財センター

倉部出戸遺跡俯瞰（南から）

遺跡付近は単調な海岸線に沿って形成された小規模な海岸砂丘の後背湿地にあたる。扇状地扇端部の地下水自噴地帯であり、周辺には弥生時代後期初頭～古墳時代前期の遺跡が数多く存在する。



倉部出戸遺跡俯瞰（西から）

遺跡は、東から日本海に注ぐ倉部川と屋越川に挟まれた微高地に立地する。写真の右上方には、四隅突出型墳丘墓など、弥生時代後期～古墳時代前期の墳墓群が調査された一塚遺跡が見える。

例　　言

1．本書は、県営圃場整備事業旭第２地区倉部工区に係る埋蔵文化財（倉部出戸遺跡、竹松遺跡）発掘調査報告書である。調査地は石川県松任市倉部町地内にあたる。

2．調査は県農林水産部耕地整備課の依頼により、石川県立埋蔵文化財センターが実施した。調査費は県耕地整備課が負担した他、一部文化庁の補助金による。

第１次調査（昭和62年度）　竹松遺跡　　担当　小嶋芳孝

第２次調査（昭和63年度）　倉部出戸遺跡　担当　北野博司

3．発掘調査にあたっては、県松任土地改良事務所、倉部工区長細川広江、倉部区長腰和之氏の協力を得た。調査員・作業員は下記のとおりである。

第１次調査　調査員　安宅　務

第２次調査　調査員　西谷昌司

作業員　宮西康信、宮西寿美子、腰　シズ、宮本菊枝、得田　隆、吉藤純子、川畑久子、高作房子、林　歓子、原　英子、藤田美和子　（順不同・敬称略）

4．出土品整理は㈳石川県埋蔵文化財保存協会に委託して実施した他、藤田美和子、長谷川啓子の協力を得た。

5．本書の執筆は第１章を川畑　誠（石川県立埋蔵文化財センター）が、他と編集は北野が行った。

6．本書で用いる方位はすべて真北、水平基準は海抜高（m）である。

7．出土品、記録資料は石川県立埋蔵文化財センターが保管している。

目　　次

本　文　目　次

第１章　遺跡の位置と環境 …… 1

第２章　調査の経緯と経過
　１．調査の原因 …… 3
　２．調査経過 …… 4

第３章　遺跡の概要
　１．地形と遺構分布 …… 6
　２．時　期 …… 6
　３．層　序 …… 6
　４．過去の調査と出土品 …… 8

第４章　遺　構
　１．竪穴住居跡 …… 17
　２．礎板柱穴群 …… 18
　３．土　坑 …… 19
　４．溝 …… 20
　５．その他 …… 21

第５章　遺　物 …… 23
　遺物観察表 …… 44

第６章　まとめ …… 53

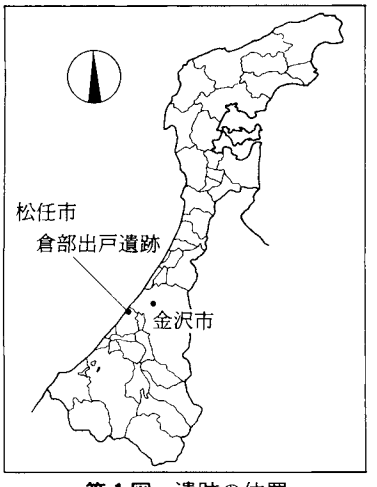
挿　図　目　次

第１図　遺跡の位置 …… 1
第２図　遺跡の位置 …… 2
第３図　倉部工区に係る発掘調査区 …… 3
第４図　遺跡周辺の地形と調査区の位置 … 5
第５図　主要遺構の配置と垂直分布 …… 7
第６図　竹松遺跡出土装飾器台 …… 8
第７図　倉部出戸遺跡採取の土器 …… 9
第８図　竹松遺跡他出土土器 …… 9
第９図　遺構平面図（１区～34区）…… 11
第10図　調査区土層柱状図 …… 12
第11図　遺構平面図（36区～53区）…… 13～14
第12図　調査区土層断面図（36区～47区）… 15
第13図　調査区土層断面図（48区～58区）… 16
第14図　SI－02実測図 …… 17
第15図　SK－17実測図 …… 19
第16図　SK－19実測図 …… 20
第17図　土層断面図SI－01、SD－25他 … 21
第18図　SI－02出土緑色凝灰岩片 …… 23
第19図　SI－02出土遺物 …… 33
第20図　SI－02、SK－26・28出土遺物 … 34
第21図　SX－01、SD－04他出土遺物 …… 35
第22図　SX－02出土遺物 …… 36
第23図　SK－17出土遺物 …… 37
第24図　SK－17・18出土遺物 …… 38
第25図　SK－18・19・20出土遺物 …… 39
第26図　SD－25他出土遺物 …… 40
第27図　SK－22出土遺物 …… 41
第28図　SK－23、SD－27～31出土遺物 … 42
第29図　P32他出土遺物 …… 43
第30図　時期別主要土器一覧(1) …… 50
第31図　時期別主要土器一覧(2) …… 51～52

第１章　遺跡の位置と環境

倉部出戸遺跡は松任市街地の北西方向約４㎞にある松任市倉部町地内の水田に位置する弥生時代後期から古墳時代前期にかけての集落遺跡であり、周辺は近年の工場用地の造成や住宅建設などで大きく景観を変えつつある。遺跡は、その源を白山に発する手取川が形成した、石川郡鶴来町付近を扇頂部にし、半径約12㎞、扇開角約110度を測る典型的な扇状地形の扇端部北辺に位置する。標高は２ｍ前後を測り、地下水の自噴が一年中認められる低湿な地域である。手取川は「その流路を七度変えた」と言われているように、古来から「暴れ川」として知られており、河道の変遷が激しい。地質の研究によると、現在では扇状地の南側に偏って流れている手取川本流も、かつてはずっと北側を流れており、大量の土砂を運搬・堆積させながら、次第に南遷してきたことが明らかとなっている。本遺跡の南側を流れる倉部川を含めた七カ用水（富樫、郷、中村、山島、大慶寺、中島、新砂川）とその分流がその河道跡といわれており、扇状地を網目状に巡っている。しかし、手取川の本流は縄文時代には本遺跡のずっと南側の徳光付近に移っており、本遺跡が出現する弥生時代後期には手取川本流の影響を直接受けない比較的安定した土地（現在は灰色低地土壌が90㎝以上堆積）になっていたと思われる。また今は明治時代以降の耕地整理事業により美しい水田風景が一望できる平坦な地形となっているが、本来は先に述べたように扇状地を流れる小河川に開析されて、起伏に富んだ島状地形を呈しており、その河川の間に形成された帯状の微高地に本遺跡を含めた各時代の遺跡が重複して立地している。また、西方約500ｍで日本海に達する。その海岸線に沿って古墳時代初頭以降に形成された小規模な安原海岸砂丘が北側に近接してあり、その意味から砂丘後背湿地に立地しているとも捉えられる。

さて、この遺跡周辺の扇端部一帯は先に述べたように、水利に恵まれた安定した可耕地を提供した地域であり、生活に適していたと思われ、県内でも有数の弥生時代の遺跡密集地となっている。縄文時代には地下水の自噴地帯に沿って遺跡が点在する形で確認されている。弥生時代中期前半には本地域にも確実に稲作農耕が定着しており、遺跡が継続して点在する。弥生時代後期から古墳時代前期になると遺跡数が飛躍的に増加し、面的な広がりをもった分布を見せはじめる。



第１図　遺跡の位置

特に弥生時代終末期とされる月影期からは比較的小規模で短期間のうちに途絶える傾向を持つ「衛星的な」遺跡が扇端部のみならず扇央部、砂丘後背地、丘陵縁辺部にも立地するようになる。その現象について、吉岡康暢氏は沖積地に基盤を持った母集落の集団の人口圧の解消をめざした再編成にともなう分村現象として捉え、農具の鉄器化により平野部の農業生産の飛躍的な向上が図られた結果とされている。遺跡の周辺では、まず弥生時代中期に横江Ａ遺跡、八田中雁田川遺跡、竹松遺跡、相川新Ａ遺跡、浜相川遺跡などの遺跡が確認されている。弥生時代後期になると本遺跡や周辺遺跡の母村的な性格を見せる「旭遺跡群」の一塚遺跡、八田小鮒遺跡の他、

竹松C遺跡、宮永市遺跡、横江A遺跡、相川新A遺跡などが出現する。「旭遺跡群」に属する一塚遺跡では、松任市教委による平成元年度の調査で後期後半から古墳時代初頭にかけて連綿と続く墓域が検出され、その発展と変遷を目の当たりにすることができる。中でも山陰に分布が濃い四隅突出型墓（弥生終末期）は北陸では2例目であり、平野部に立地することからも注目される。なお、横江A遺跡などでも方形墳丘墓が確認されている。また、八田小鮒遺跡、一塚遺跡（オオミナクチ地区）などで玉生産が確認できる。弥生終末期に位置づけられる月影期になっても遺跡の増加傾向は続き、前代の遺跡の大半は存続、さらに宮永遺跡、同B遺跡、竹松遺跡などが出現し、古墳時代初頭までのその規模を維持している。本遺跡もこのような流れの中で成立・展開したと理解することができよう。

（川畑）

参考文献

『金沢周辺の第四系と遺跡』　北陸第四紀研究グループ　1975

『松任市横江A遺跡発掘調査報告書』　石川県立埋蔵文化財センター　1984

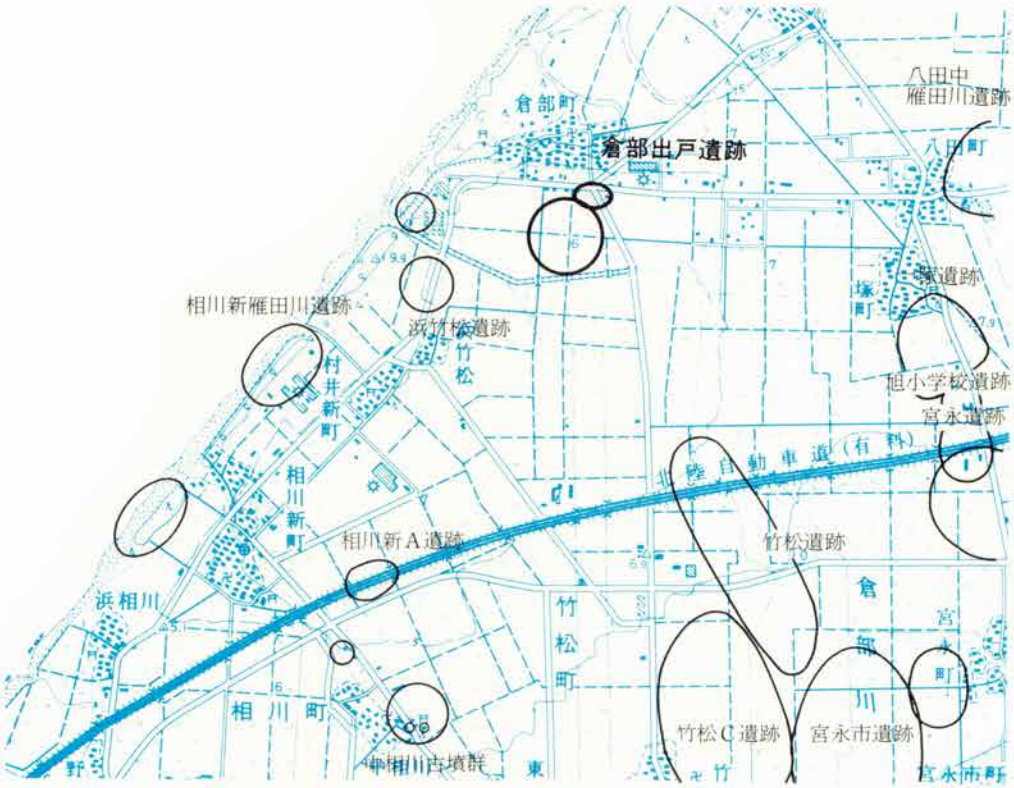
『松任市宮永遺跡』　石川県立埋蔵文化財センター　1984

『松任市横江A遺跡』　松任市教育委員会・株式会社明石合銅　1987

『松任市一塚オオミナクチ遺跡』　松任市教育委員会　1987

『松任市竹松C遺跡』　松任市教育委員会　1988

『松任市八田小鮒遺跡』　松任市教育委員会　1988



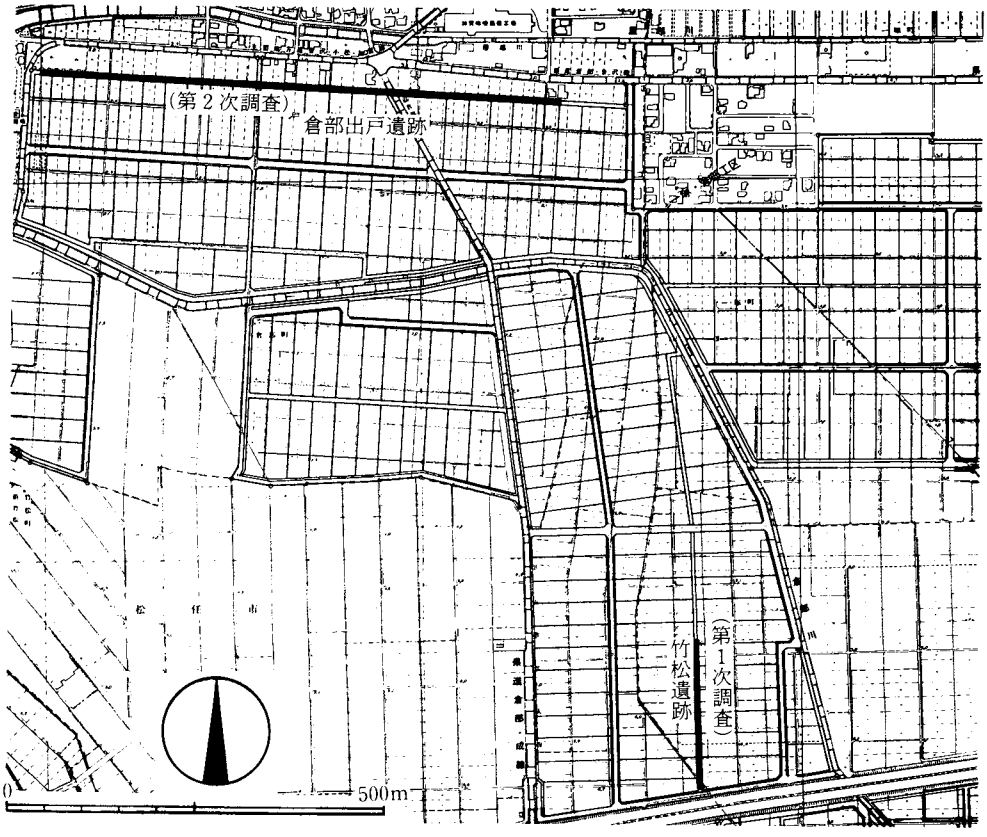
第2図　遺跡の位置（1/25,000「松任」）

第２章　調査の経緯と経過

１．調査の原因

調査は県営圃場整備事業旭第２地区倉部工区に係る緊急発掘調査である。同事業は、現況の小区画水田（明治44年～大正２年区画整理、標準８ａ）を一筆30ａ程度に大型化し、用排水路の分離および農道の整備を行い、大型機械の導入、水田の汎用化により農業経営の近代化を推進する目的で計画され、旭第２地区は昭和58年度に着工となっている。本地区は、松任市街地の北郊約３km、手取川扇状地扇端に形成された小規模な海岸砂丘の後背湿地に位置する。季節的地下水の自噴により灌漑不良な半湿田、グライ土壌地帯を多く抱えており、調査においても起伏のある微地形の低地を中心として腐植物に富む泥質土層を広い範囲で確認している。

倉部工区施工に関しては、県松任土地改良事務所より埋蔵文化財分布調査の依頼があり、昭和60年10月８日、同61年10月２日に本センターが試掘調査を実施した。倉部川左岸で新規の遺跡（弥生・古墳）、竹松町地内の北陸自動車道北側で竹松遺跡（県遺跡№1197）の広がりを確認し、協議の結果、面工事に係る部分は盛土保存、掘削の避けられない排水路敷のみを発掘調査の対象とした。調査は、翌年７月17日～22日に本センター（担当　小嶋芳孝）が実施した（第１次調査）。また、昭和62年10月には県耕地整備課の依頼により、現倉部集落南側の分布調査を実施し、倉部出戸遺跡（県遺跡№1195）、倉部館跡（県遺跡№1196）の広がりを確認した。



第３図　倉部工区に係る発掘調査区

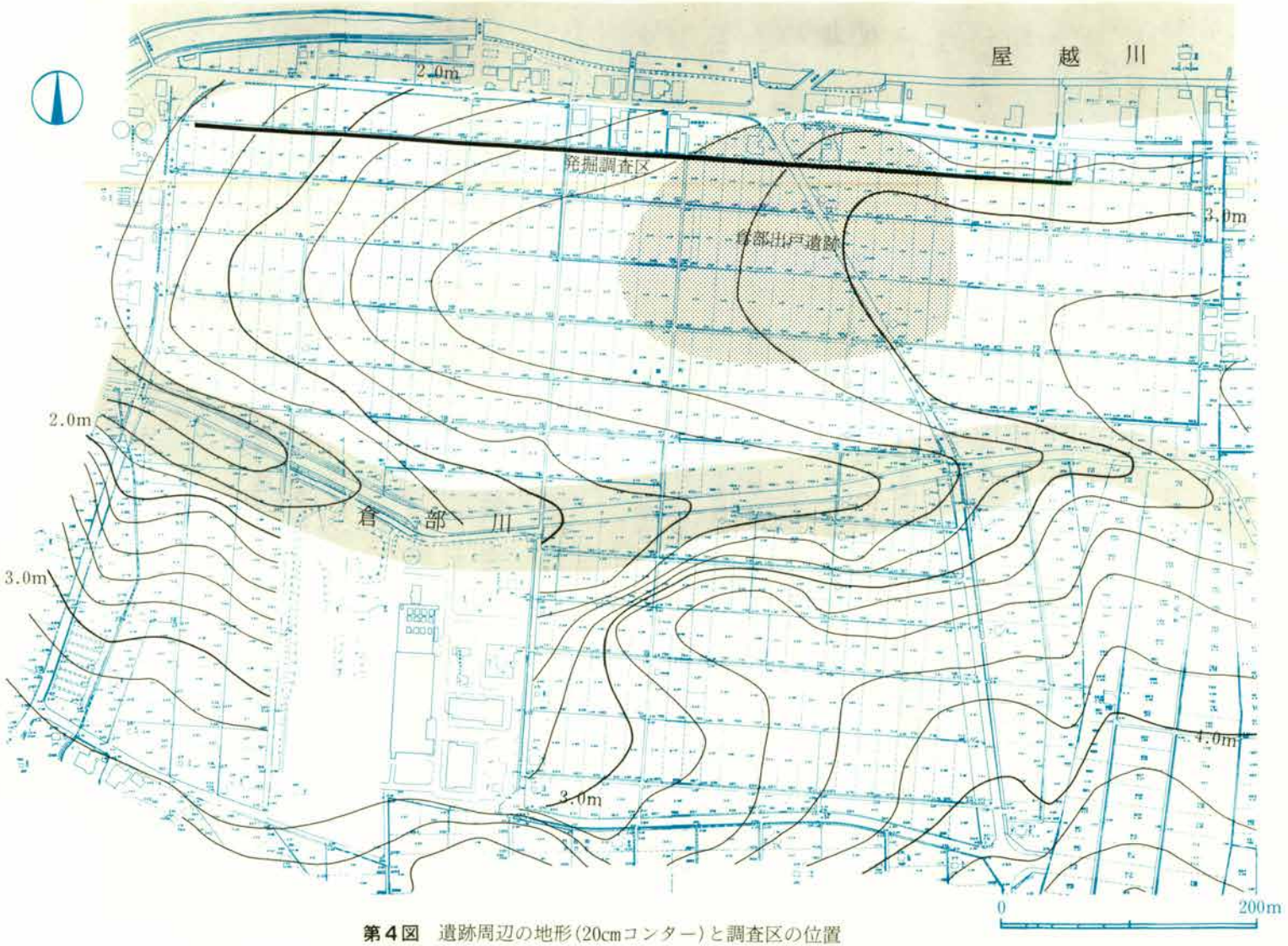
県松任土地改良事務所との協議により、前年度同様、排水路敷のみを発掘調査の対象とし、昭和63年５月13日～７月15日にかけて実施した（担当　北野博司、第２次調査）。発掘調査の費用は県農林水産部耕地整備課の負担および文化庁補助金による。

２．調査経過

第１次調査　約400㎡を対象に調査区を設定し、バックホーにより表土を除去したが、後世の氾濫による撹拌が多く、遺構は希薄であった。土層観察を主とした調査を行い、実働２日間で現地調査を終了している。弥生時代後期の土器が若干出土した。

第２次調査　県松任土地改良事務所と調査日程を協議したところ、５月上旬より現地調査に入ることとなり、まず県道倉部・成線以西約940㎡分について、作付された麦の青刈りを行って発掘調査を開始した。５月13日に仮設建物を設置し、調査器材を搬入、同日～16日にかけて重機による表土はぎを行った。５月17日～25日に46区～36区ＳＩ－02，ＳＸ－01等の遺構集中地点を、５月26日～６月１日に35区以西の遺構の希薄な地区の調査を実施した。６月１日には45区の下層に落ち込み（ＳＸ－02）を発見、掘り下げを開始し、６日まで調査を行った。本日で西半部の調査を終え、東半部の麦の刈り取りを待つため、調査を一時中断する。６月20日、調査を再会し重機により東半部約560㎡分の表土除去を行う。東半部は、48区～53区まで遺構・遺物量とも多く、７月７日に調査を終了している。同日と８日には、西半部県道脇の豆の収穫待ちであった部分の調査を行う。７月12日～14日には42区ＳＩ－02の南側を拡張して竪穴住居跡１棟を完掘した。15日に器材を撤収、本日で現地調査をすべて終了する。

資料整理　出土品整理（洗浄・記名・分類・接合・復元・実測・トレース）は、平成元年度に㈳石川県埋蔵文化財保存協会に委託して実施した。報告書作成に係る作業は平成元年12月～平成２年３月にかけて行った。



第4図　遺跡周辺の地形(20cmコンター)と調査区の位置

第３章　遺跡の概要

１．地形と遺構分布

以下、第２次調査（倉部出戸遺跡）の報告を行う。

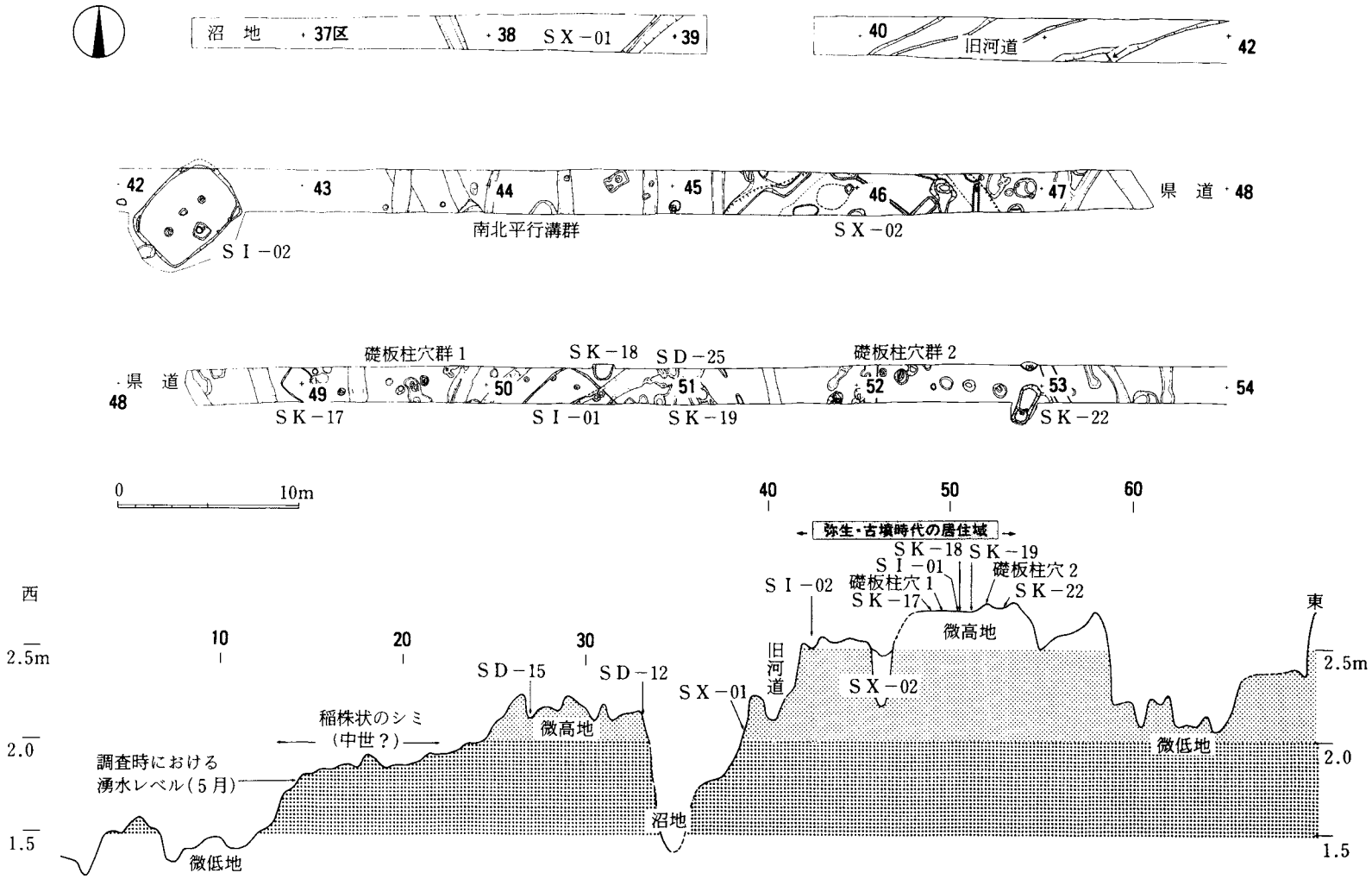
遺跡は扇状地扇端部の小規模な海岸砂丘の後背湿地に立地している。現地表で標高は２ｍ代を測る。砂丘は古墳時代以降の形成とされ（藤1975）、弥生時代の汀線はより沖合いにあったと考えられている。倉部出戸遺跡の立地する面は、東から日本海に注ぐ倉部川と屋越川に挟まれた帯状の微高地を形成し、西へなだらかに傾斜する（第４図）。現況は起伏の少ない水田地帯であるが、調査成果から弥生・古墳時代の微地形を見ると、県道倉部・成線沿いが最も高く（標高2.7m）、ここを居住域としている（第５図）。その西側（35区付近）は標高1.5m前後で湧水のある沼地となっており、厚くピート層が堆積する。さらに西側の26～32区は再び微高地（標高2.2m）となるが、中世以降とみられる溝状遺構があるのみで、弥生・古墳時代の遺構はない。13～21区は標高1.8～1.9mとほぼ平坦で径５～10㎝の不整形な稲株状のシミが多数検出された。埋土は第３層で、時期は中世ないしはそれ以降とみられる。13区以西は標高1.5m前後の低地となり、湧水により調査時で標高1.8m付近まで湛水した。県道以東は、西側から続く微高地があり、古墳時代前期の遺構が集中している。54～58区は僅かな窪地となり遺構はほとんど見られない。57区には噴砂の跡が帯状に検出された。59～70区は大きな鞍部となり、耕作土下には砂丘砂に似た砂層が厚く堆積している。70区以東は再び微高地となるが遺構は検出されなかった。

２．時　期

遺跡は弥生時代後期前半～中世の複合遺跡であるが、時期ごとに分布には若干の偏りがある。弥生時代後期前半は県道東側の52～54区と一部西側の45～46区（下層）、後期後半は県道西側の38～45区、後期終末は46区～県道東の51区、古墳時代前期は県道東側の48～52区にそれぞれ遺構の分布の中心がある。古代は43区付近、中世は40区の旧河道とその東側で散発的に遺物が出土するにすぎず、明確な遺構は検出されなかった。中世以降のものとみられる管状土錘は、全域にわたって耕土～Ⅲ層の間で散発的に出土している。中世の遺物は南西方向に存在が推定される倉部館跡に伴う可能性が高いが、今回の調査区内には関連遺構は認められなかった。

３．層　序

遺構の集中する県道付近の微高地は、耕作等により既に遺構面が削平され、耕土・床土直下が地山となっている。他の地区では、中世以降の遺物を含むピート質の黒色土（Ⅲ層）が耕作土下に存在する。その下には灰褐色シルト層（Ⅳ層）が存在し、これが弥生～古墳時代の遺物包含層となっている。低地部（ＳＸ－02，50区以東）ではこの包含層の下に黄白色～灰白色のシルト層（Ⅴ層）が堆積し、その下の暗灰色シルト層（Ⅵ層）には弥生時代後期中頃の遺物を含む。Ⅴ層は、弥生時代後期中頃～後半に、洪水等により遺跡地が緩やかに冠水したことを示



第5図　主要遺溝の配置（36区～53区）と垂直分布

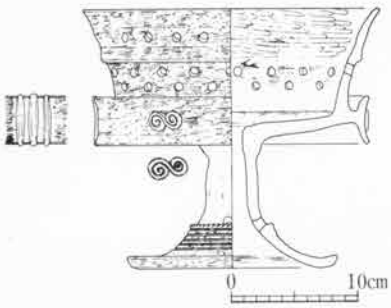
すとみられる。また噴砂は、同層の下面で検出されたことから、ほぼ同時期の可能性が高い。地山は灰色砂層で、以下はシルト層と砂層の互層となる。礫層は42区付近が最も高く、遺構検出面に露呈するが、他の地区では確認されなかった。

4．過去の調査と出土品

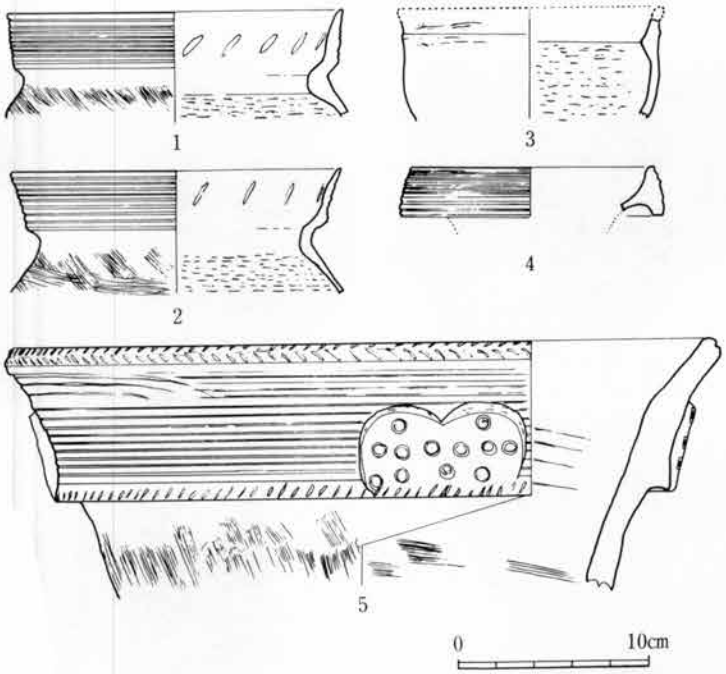
倉部出戸遺跡は、1969年（昭和44）、今回の調査区脇を流れる用水付近（46～47区付近か）で地元小学生が土器を採取したことから発見され、四柳嘉章氏らが確認して報告している（第７図，四柳1970）。土器は弥生時代後期末の月影式（１～３，５）を主体とする。第８図は、竹松遺跡他採取の土器で、１・２・３は、倉部町林隆夫により北陸自動車道の工事中に発見されたものである。１は口径27.0cmの大型甕形土器で、短い頸部に内傾ぎみに立つ口縁部がつく。２は口径23.5cmの装飾器台形土器で、透しは円孔で２段まで確認できる。著名な竹松遺跡出土装飾器台形土器（第６図，四柳1971）と同一形式で類例の少ないものである。有段の口縁部が中ぶくれとなることや透し部分の内面にケズリ状のハケ調整を行っている点など、細部の特徴も共通する。３は須恵器杯蓋で７世紀第３四半紀に位置付けられる。砂礫・シルト分の少ない粘土質の胎土で、白色軟質の土塊（ないしは屑石）を多量含む。能美窯産と推定できる。４は昭和60年度の県営圃場整備事業にかかる分布調査の際に出土したもので、古墳時代前期、漆町遺跡７群土器に対比できる、布留式甕形土器の古い時期の資料である。同調査ではその他弥生時代後期前半の土器も出土している。

倉部出戸遺跡（1969年）

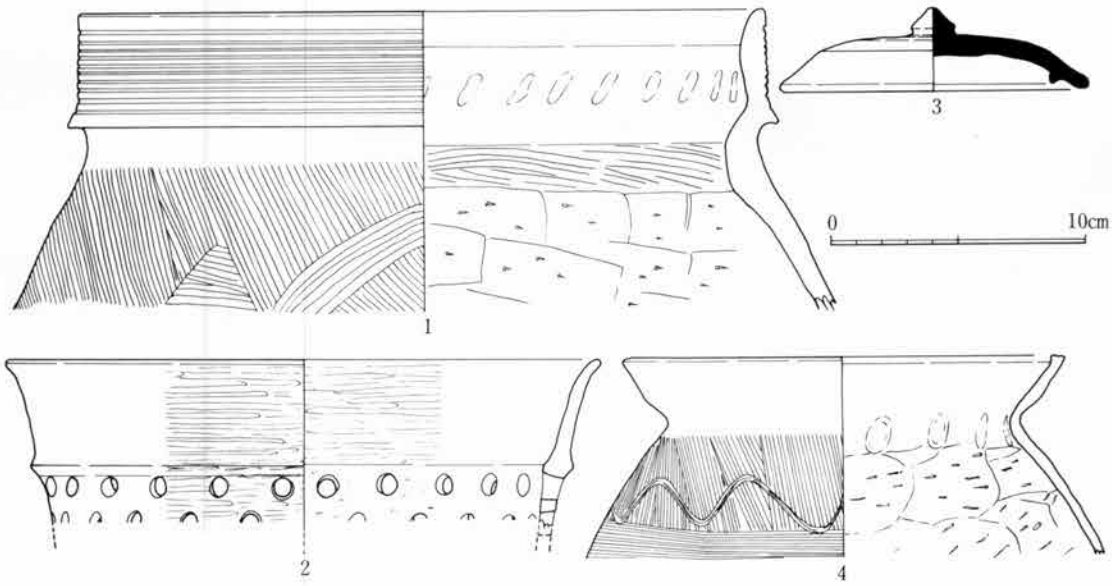
遺跡発見時の調査風景



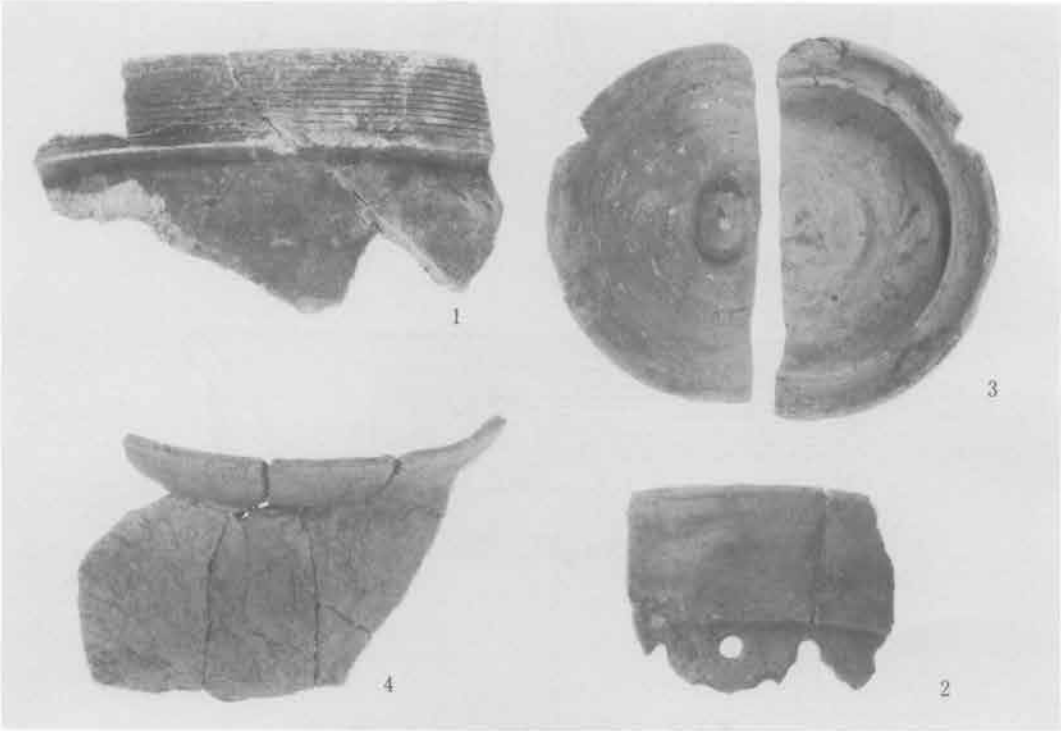
第６図　竹松遺跡出土装飾器台（前田 1988より）



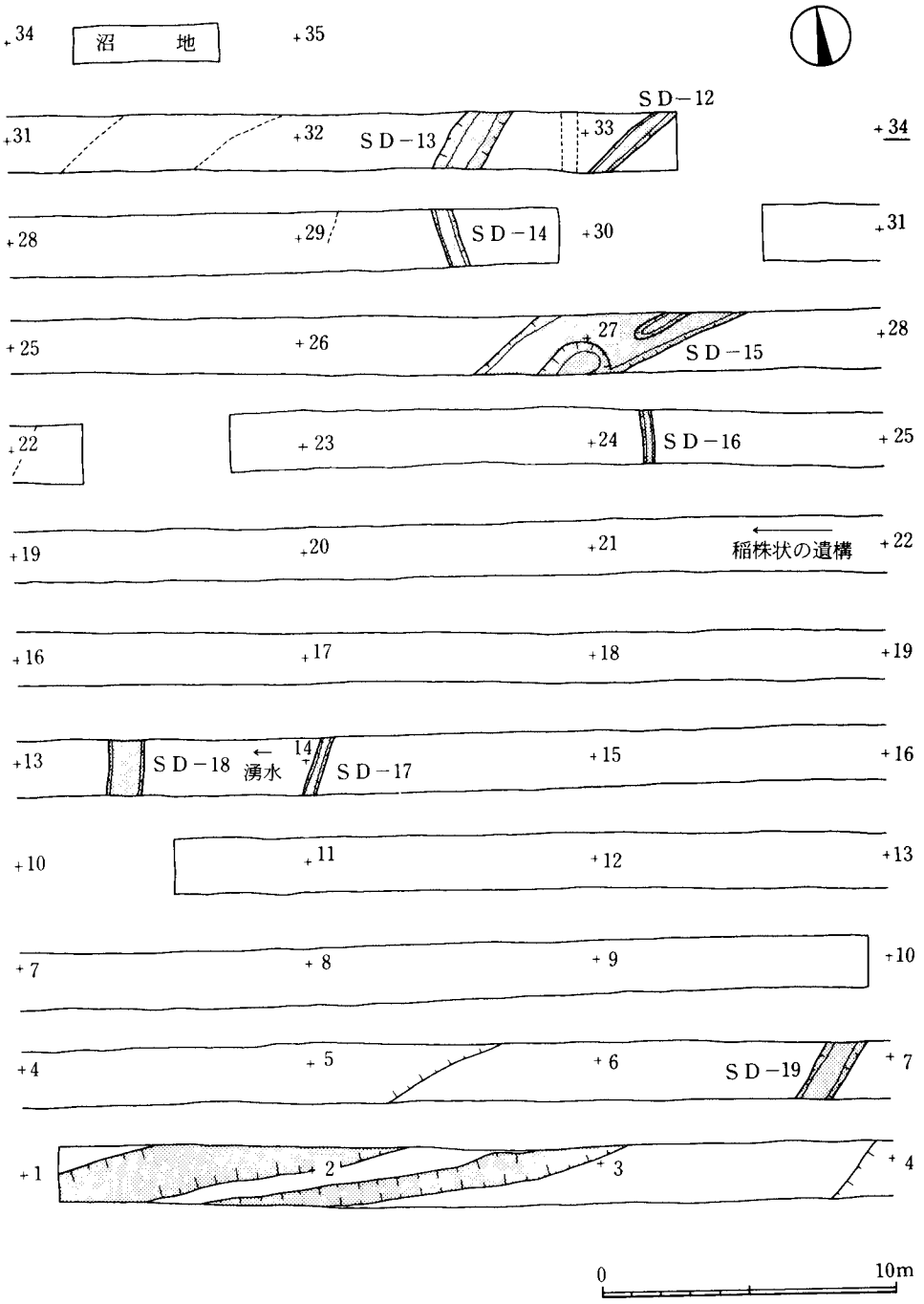
第7図　倉部出戸遺跡採取の土器（四柳1970）



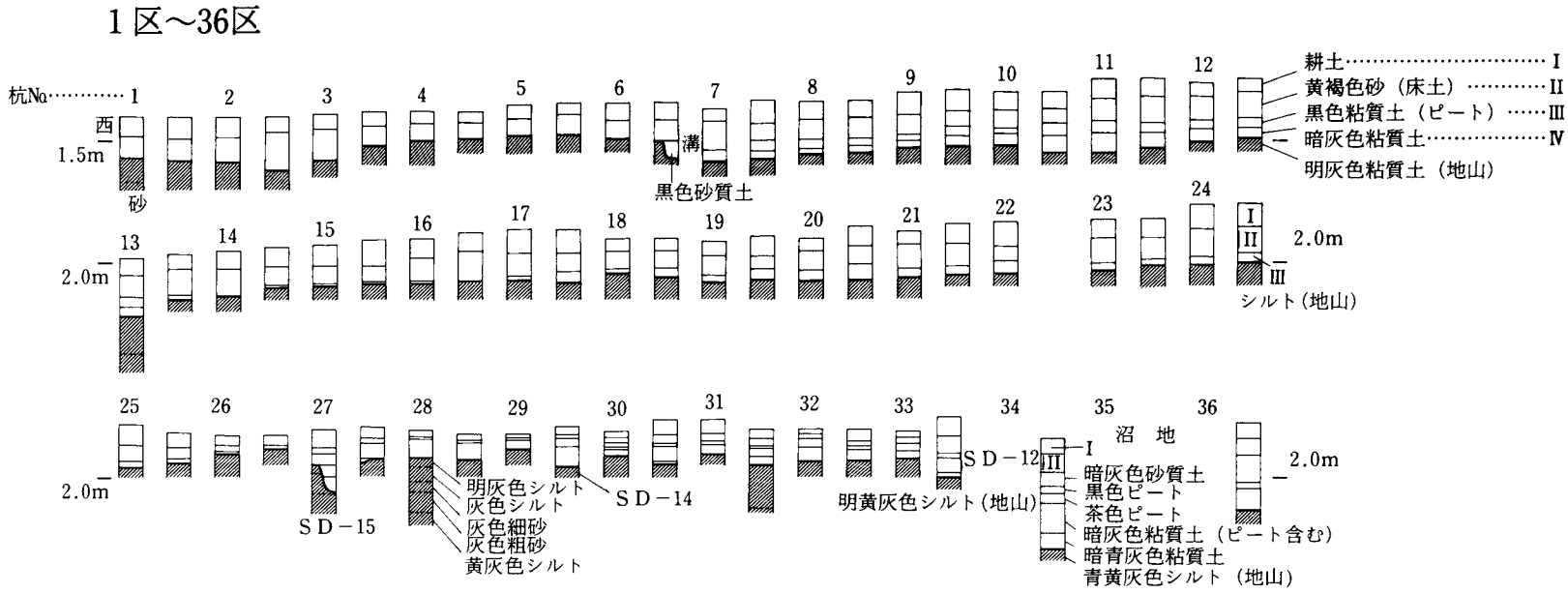
第8図　竹松遺跡他出土土器

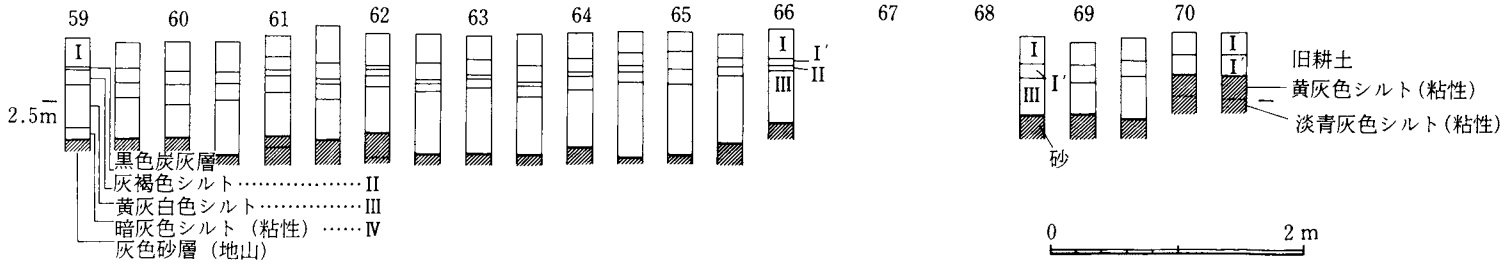


竹松遺跡他出土土器（第８図）

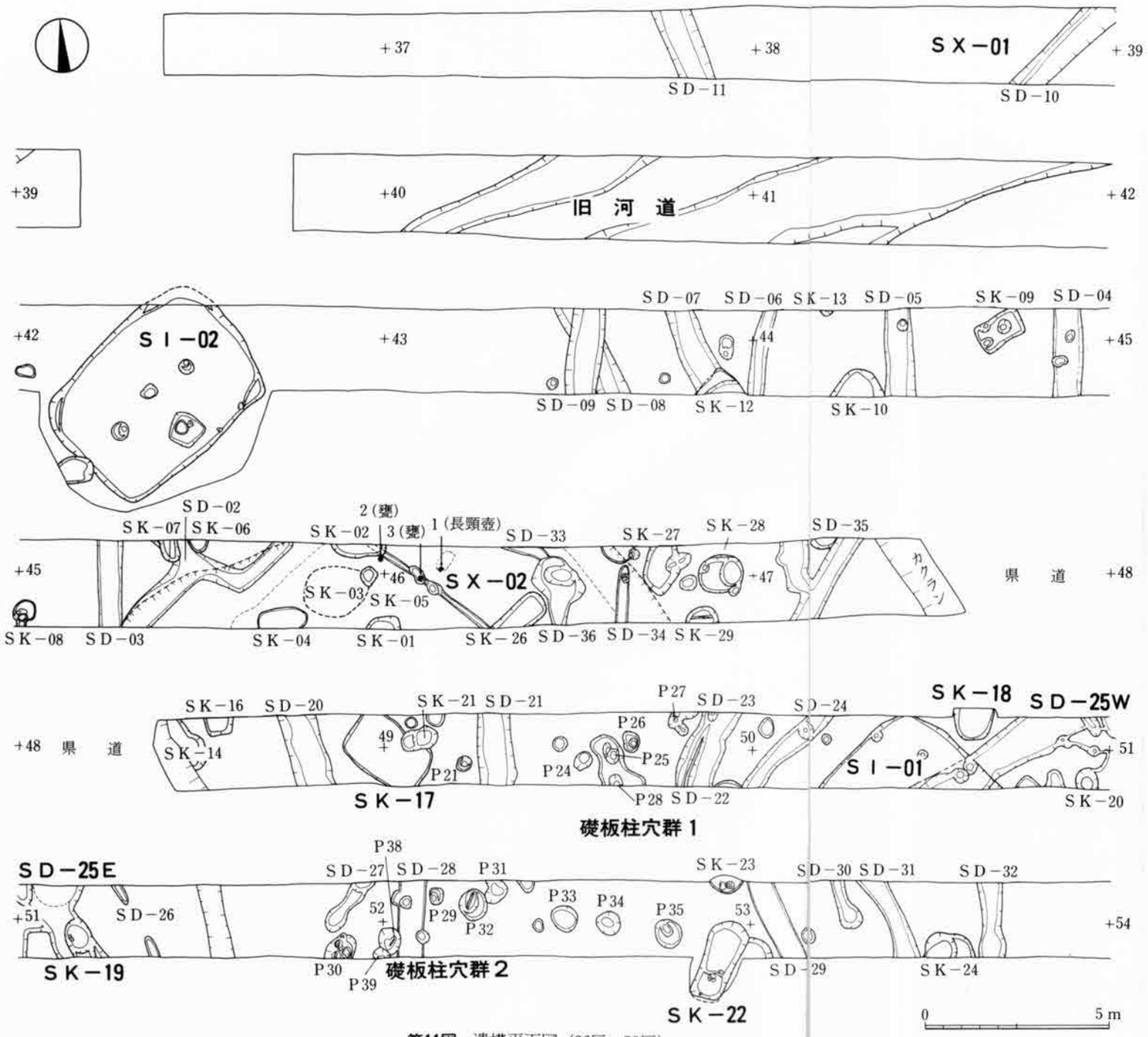


第9図　遺構平面図（1区～34区）

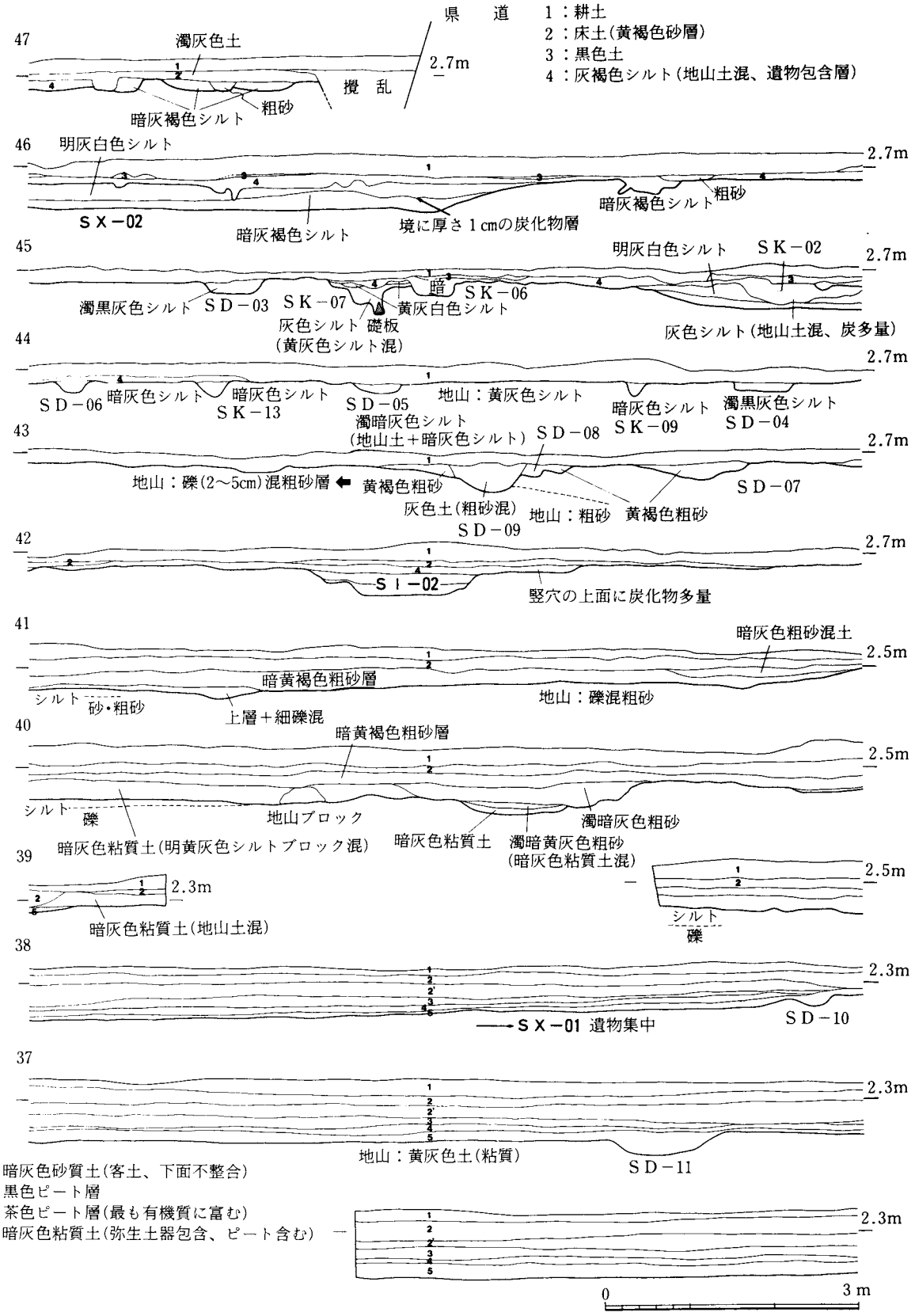




第10図　調査区土層柱状図（1～36区、59～70区）

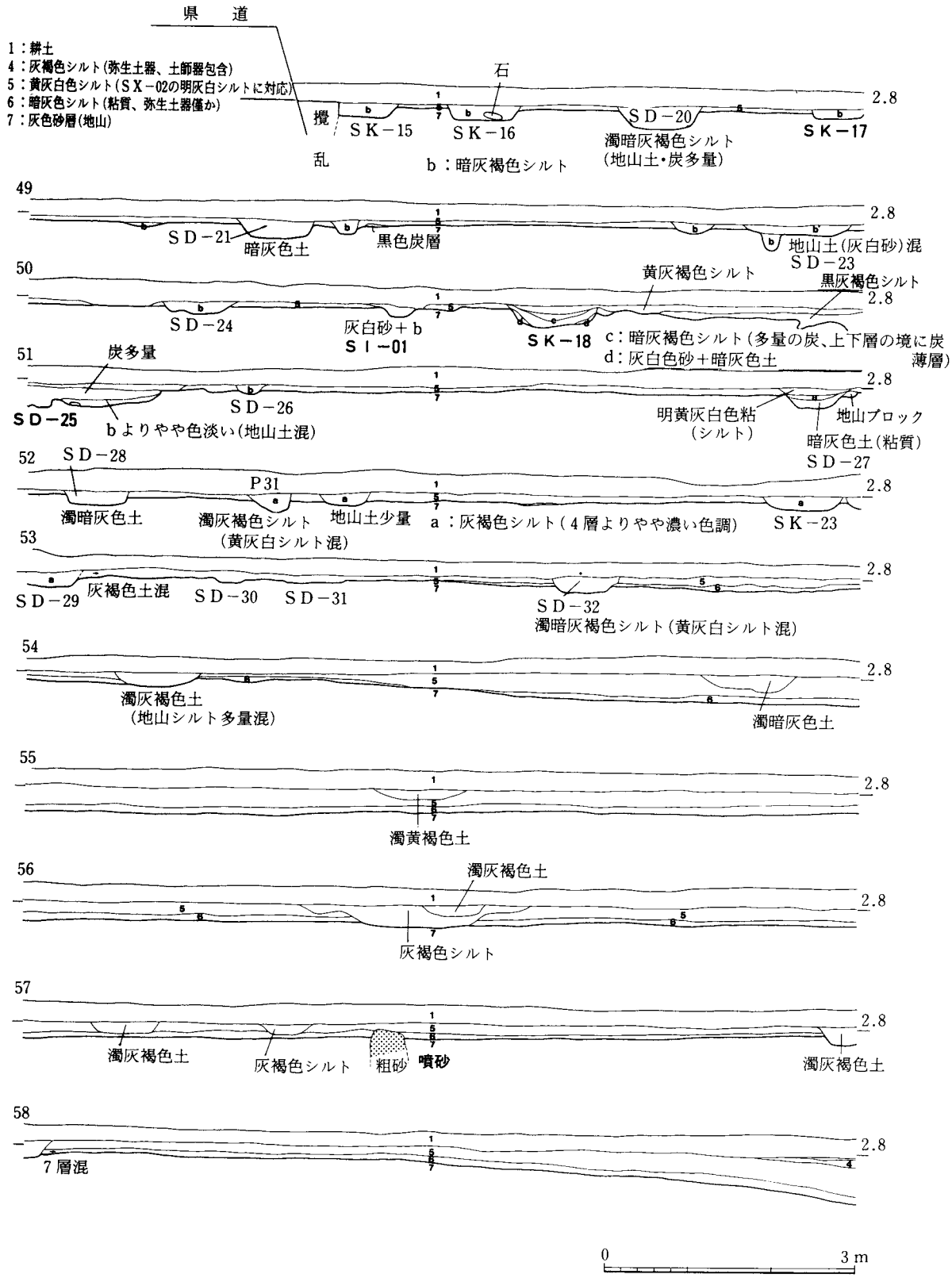


第11図 遺構平面図（36区～53区）



2′：暗灰色砂質土(客土、下面不整合)
3：黒色ピート層
4：茶色ピート層(最も有機質に富む)
5：暗灰色粗質土(弥生土器包含、ピート含む)

第12図　調査区土層断面図（36区～47区）

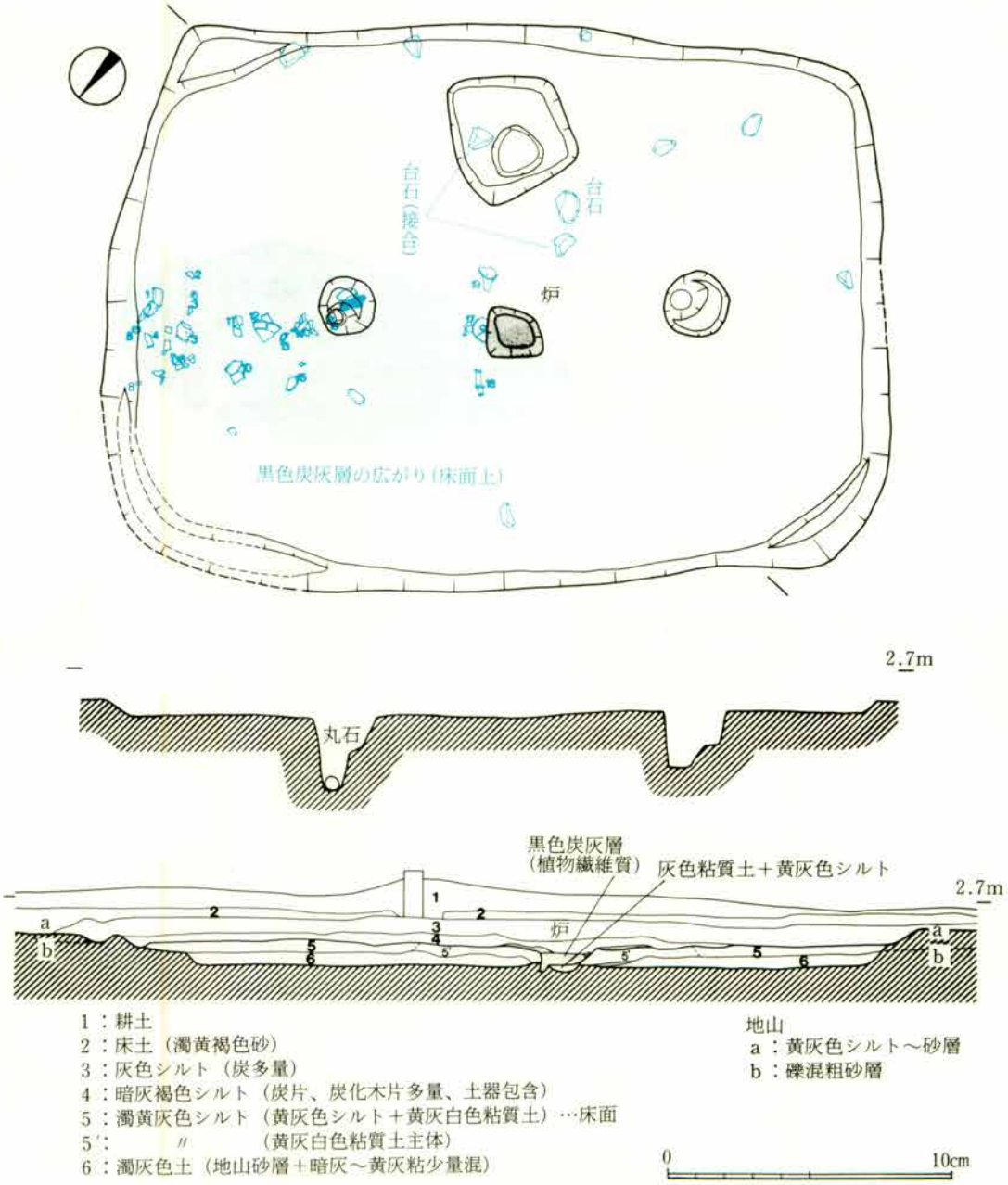


第13図　調査区土層断面図(48区～58区)

第4章　遺　　構

1．竪穴住居跡

ＳＩ－02　42区で北半部が検出され、南半部を拡張して１棟を完掘した。平面形は5.50m×4.00mの隅円長方形で、２本主柱（柱間2.45m）の構造である。主軸はN47°Ｅ。床面には南東壁沿いに方形の土坑、主柱間の中央やや北西よりに炉が存在する。深さは、遺構検出面が削平を受けていることから非常に浅く、床面までが12～16cm、掘方底までが30cmである。南隅を除く３



第14図　ＳＩ－02実測図

隅は２段の掘り込みとなっている。主柱は径40～45cmの円形で２段掘り、深さそれぞれ50cm、40cmを測る。北東柱は底面に径10cmの丸石を置く。埋土は段以下の下層が地山砂混じりの黒色炭灰層、その上が暗黄灰色砂質土（灰褐色土混）、上層が灰褐色土となり、上面から炭化木片、拳大の石数個が出土した。丸石付近から出土した土器は床面上の土器と接合（第19図11）しており、土層も床面上の黒色炭灰層に対比できるとみられることから、柱穴は柱が抜き取られ、土器の廃棄後埋め戻されたと考えられる。丸石はその際に投入されたのであろう。土坑は0.85m×0.90mの不整方形で、中央部は略円形にやや深くなる。深さは段部で23cm、最深部で28cmを測る。炉は35cm×40cmの略方形で深さ20cm、植物繊維質の黒色灰層が充塡する。炭化物は周囲に認められたが、焼土や壁の赤化はなかった。灰穴炉かと推定されるが、黒色炭灰層は柱穴内下層の埋土と同様、一次的なものではなかろう。床面は、地山の礫混じり粗砂層の上に黄灰白色の粘質土を入れて構築する。壁溝は検出されなかった。なお、竪穴自体が埋め戻されたかどうかは判断できなかった。

遺物は北東よりの黒色炭灰層の上を中心に出土した。土器は破片が分散した出土状態を示しており、北東側から廃棄されたものと推定できる。台石は土坑の周辺で床面から浮いて破損品が出土している。その他緑色凝灰岩片３点が埋土中から出土した。これらの遺物はいずれも二次的なもので竪穴に直接付属するものではないが、床面状に数cmと薄く堆積した黒色炭灰層直上からほとんどが出土しており、この層が竪穴廃棄とさほど時期差がないと推定されることから、竪穴住居の時期とほとんど時間的な隔たりはないであろう。時期は弥生時代後期後半（法仏式期）に位置付けられる。

ＳＩ－01　50区で検出したものであるが、一隅を検出したのみで竪穴住居跡とする確証はない。検出面からの深さは、掘方底まで20cm、推定床面まで10cmと浅い。断面図には壁溝状の凹みがあるが、他では検出されていない。主柱穴となりうるようなピットはなく、その他の施設もない。土器は小片があるのみで、時期を特定できるものはないが、弥生時代後期末（月影式期）のＳＤ－25Ｗよりは古い。検出したコーナーが明瞭な矩形を呈することから一応竪穴住居跡の可能性を考えておきたい。

２．礎板柱穴群

礎板とみられる板材を出土するピットは、県道東側の49区と52区の２群がある。その他では県道西側のＳＫ－07から断面三角形の角材（９×９×９×52cm）、ＳＫ－29からは長62cmの薄板材が出土した。柱穴か否かは不明だが、ＳＫ－07は黄灰白シルト層下の遺構で52区の柱穴群と同時期とみられる。ＳＸ－02の土器のあり方からみて、周辺に住居の存在した可能性はあろう。

礎板柱穴群１　Ｐ21、Ｐ24～Ｐ27の５基のピットの底から礎板に使用されたとみられる板材断片が出土した。径は40～50cm、深さは40cm前後である。Ｐ24～Ｐ27は北東－南西方向に列状に並び、Ｐ25を除く３基はほぼ1.4m等間となる。柱穴配置は不明ながら少なくとも１棟の建物は存在したと推定する。遺構面は削平されているが、竪穴ではなく平地式の建物と考えられる。時期を特定する遺物の出土はなかったが、52区柱穴群とピットの形状・埋土が類似しており同時期と

考えている。

礎板柱穴群２　51区～52区のＰ29～Ｐ33，Ｐ38のピットで礎板とみられる板材が出土した。形態の類似するＰ34・35・39も礎板を有した可能性が強い。Ｐ30は３基、Ｐ31は２基のピットが複合している。Ｐ29・30・32・38・39は灰白色シルトと灰褐色シルトの混合で上面が埋めこまれている。埋土は暗灰褐色シルトで炭化物を多く含む。Ｐ31は特に炭が多く焼土も含む。Ｐ33～35は比較的明るい地山質土混じりの灰褐色シルトを埋土とする。Ｐ30～Ｐ32は礎板柱穴群１と同様Ｎ70°Ｅ前後の方位をとる。礎板は長めの板材を用いピットの形状もそれにあわせたＰ32・38、短い柱材断片を用いたＰ30・31の２種がある。柱穴の深さは、Ｐ30が55cm、Ｐ31・32・38は40cm前後、Ｐ33・35は25～30cm、Ｐ29・34が15～20cmである。２棟以上の複合が予想され、調査区が狭いため柱穴配置は不明であるが、多角形（環状）となる可能性もある。時期はＰ32が弥生時代後期前半（第29図１）で、ＳＤ－28（混入品）など周辺部からは同期の土器が多く出土している。

３．土　坑

遺物の出土した土坑を中心に述べる。

ＳＫ－01～06　灰褐色シルトを埋土とする月影式期の土坑。ＳＫ－04は底面に炭化物層があり焼土を混入する。

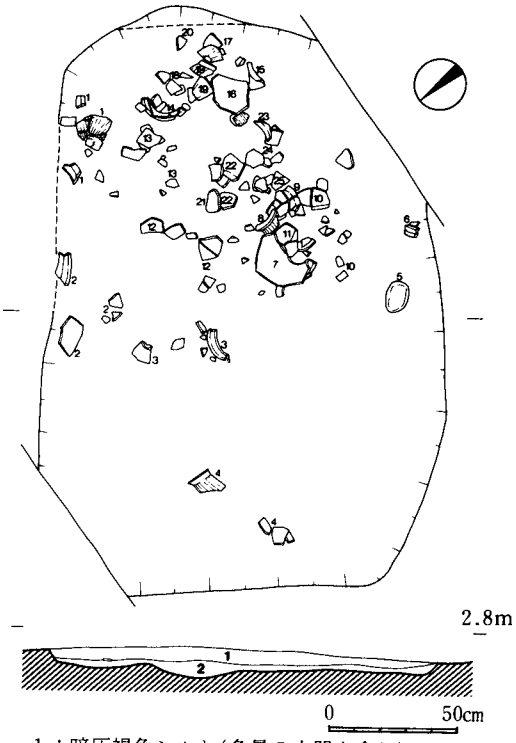
ＳＫ－08，09　暗灰褐色シルトを埋土とする法仏式期の土坑。ＳＫ－09は1.3×0.8mの長方形、深さ14cmを測る。内部に深さ30cmのピットがある。緑色凝灰岩片１点が出土している。

ＳＫ－26　暗灰褐色シルトを埋土とする土坑で、平面形は長方形とみられ幅70cm、深さ27cm。全面に使用痕をもつ軽石１点が出土した。法仏～月影式期の土器が出土している。

ＳＫ－27，28　楕円形の土坑でともに深さ25cm。ＳＫ－28からは月影式期の土器が比較的多く出土した。

ＳＫ－17　平面形は略長方形で2.25×1.55m、検出面からの深さ約10cm。遺構面は削平されており本来はより深かったとみられる。長軸方位はＮ51°Ｗ。埋土は上層が多量の土器を含む暗灰褐色シルトで、下面に炭化物を多量含む地山質土混じりの黒灰褐色シルト層がある。時期は古墳時代前期初頭白江式期に属する。ＳＫ－21を切って構築している。

ＳＫ－18　幅1.0m長方形ないしは楕円形の土坑で調査区外へのびる。検出面からの深さ25cm。埋土は多量の炭化物を含む暗灰褐色シルト層で、上下層間に炭化物の薄層を挟む。土器は

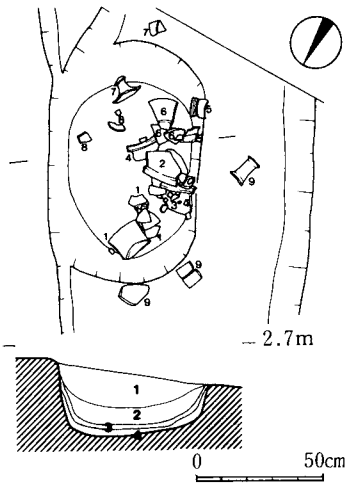


１：暗灰褐色シルト（多量の土器を含む）
２：黒灰褐色シルト（炭多い、地山シルト混じり）

第15図　ＳＫ－17実測図

下層を中心に出土した。月影式期に属する。

ＳＫ－19　ＳＤ－25Ｅ内で検出された楕円形（0.80×0.60m）の土坑である。ＳＤ－25Ｅとは切り合い関係になく、炭化物層の入り方から考え、時期差はほとんど認められない。検出面からの深さは63cm、埋土は自然堆積とみられ、１層が多量の大形土器片を含む暗灰褐色シルト層、２層はそれに地山質土が混じるもの、４層は粘性を帯びた暗灰色シルト層で土器はほとんど含まない。２－４層間に黒色炭灰の薄層（３層）が堆積し、ＳＤ－25の埋土につながっている。同様の埋土をもつものに49区ＳＫ－21があり、そこでは植物繊維質の灰層（２～３cm）下に厚さ１cmの焼土面が認められた。３層の下で人頭大の石１個が出土した。土器は１層を中心に出土し、一部ＳＤ－25Ｅにもかかるが、両者で接合するものもある。時期は月影式期に属する。



1：暗灰褐色シルト（下方に大形土器片多量）
2：　〃　（黄灰色シルト地山土混じり、土器片少量）
3：黒色炭灰層　（藁状の植物灰）
4：暗灰色シルト　（粘性、土器小片僅か）

第16図　ＳＫ－19実測図

ＳＫ－22　長さ2.3×1.0mの略長方形の土坑。主軸方位はＮ27°Ｅ。検出面からの深さは北側が30cm、南側は20cmと一段浅くなる。埋土は１・２層が濃い暗灰褐色シルト層で、下層には粘性を帯びた暗灰色シルト層が堆積する。各層間には黒色炭灰の薄層を挟み特に埋め込まれた形跡はない。土器は１層が小片を主とし、２層には大形破片（高杯等）を含むが、３層にはほとんど含まない。時期は白江式期に属する。

ＳＫ－23　調査区壁際で一部のみを検出した。深さ約20cm。月影式期に属する。

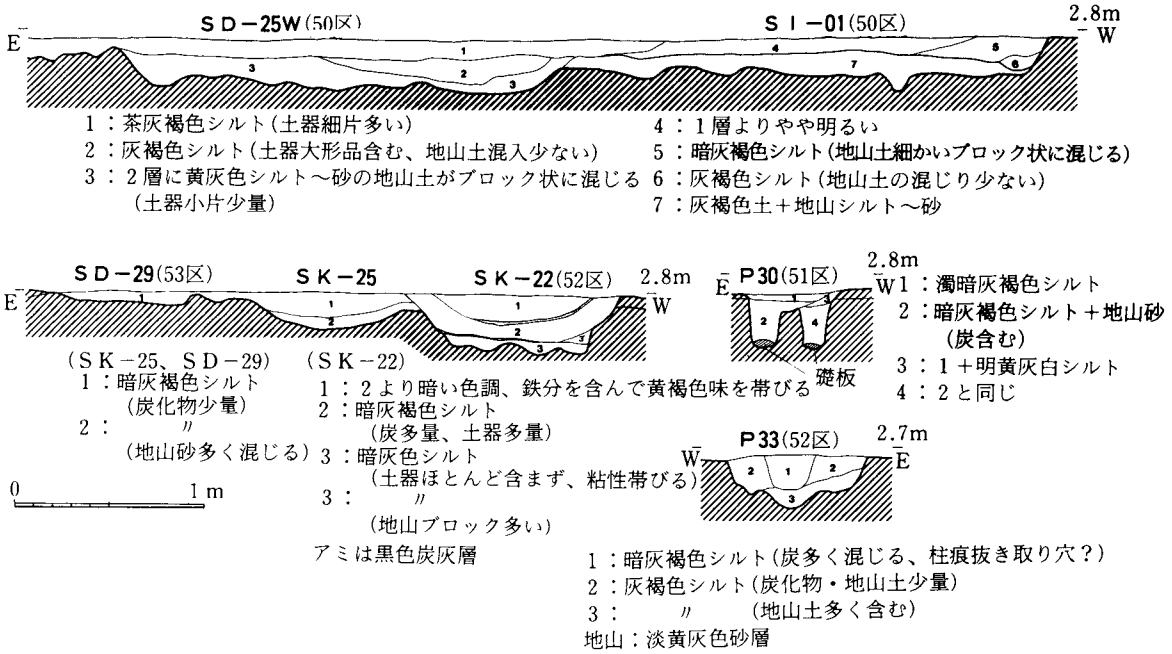
４．溝

ＳＤ－03～05　幅約60～70cm、深さ10～15cm、南北方向に平行する溝で、埋土は濁黒（暗）灰色シルト層である。03と04間が3.6m、04と05間が4.6mを測る。埋土に第３層の黒色土ブロックを含むことから、近世以降の時期と推定される。扇状地扇端部～沖積地にかけてみられる農業生産に関わる遺構であろう。

ＳＤ－07・08　Ｎ20°～25°Ｗ方向に並走する溝で、埋土は黄褐色粗砂層である。ＳＫ－12も同様の埋土で、ここからは近世の遺物が出土した。ＳＤ－09は耕土類似の埋土で、耕地整理前項のものであろう。

旧河道　微高地縁辺部の傾斜にあわせ、北東－南西方向に走る。現屋越川方面から南西方向に流れたものである。40区の中央部が本流（幅約1.5m）で最も深く、南東側は約５ｍまで氾濫原となっている。埋土は一部に砂利を含む粗砂層となっており、中世期の遺物を含む。

ＳＤ－10・11　ＳＤ－10はＳＸ－01の落ち込み部にかかる傾斜変換点に掘りこまれた溝である。ＳＤ－11はＳＸ－01内にあり幅1.0m、深さ30cmを測る。ピート質の暗灰色土を埋土とする。と



第17図 土層断面図 SI−01、SD−25・29、SK−22・25、P−30・33 (1/40、ただしP−30のみ1/80)

もに法仏式期に属する。

SD−21・28 県道西側のSD−03〜05と同様の溝である。平面図はないが54区以東にも同様の溝は一定間隔で認められる（第13図）。

SD−24 SI−01の一辺に平行する溝で、月影式の土器が少量出土している。SD−22・23も同様である。SD−20には月影式期の土器と一部白江式に下るとみられるものが出土している。いずれも小片が主体で出土遺物からの下限時期の特定は難しい。

SD−25 直角に折れるとみられる溝で、幅約1m（上面幅はさらに大きい）、深さ25〜30cmを測る。方位はN30° W（N60° E）。埋土は灰褐色のシルト層が主体で、2層からは土器の大形破片が出土する。1層は細片が多く出土するが、3層からは僅かである。東溝内にあるSK−19とは切り合い関係は認められず、土坑の炭化物層が一部本溝にもかかることからほぼ同時期とみられる。方形周溝墓の可能性も考慮しておきたい。月影式期に属する。

SD−27〜32 いずれも幅1m以下、深さ20cm以下の小規模なものである。土器はSD−29と31で多く、月影式期のものが出土している。50〜51区の同期のものよりやや古い様相がある。SD−28は近世以降の時期のものであるが、埋土からは弥生時代後期前半の土器が3点出土した。同期の礎板柱穴群を切っているためであろう。

5．その他

SX−01 38区の微高地から沼地への自然の落ち込みで、SD−10の西側付近を中心に最下層のピート層から多量の土器が出土した。微高地側から廃棄したものであろう。法仏式期に属する。上層では月影式期のものも僅かに出土しており、同期にもこの落ち込みが存在したことがわかる。

ＳＸ－02　45～46区にかけて検出された落ち込み部で、自然地形と思われる。北側へはさほど伸びず、南側へ開くようである。埋土は下層に粘性を帯びた暗灰褐色シルトが堆積し、その上位から３個体の土器が出土した。その他の破片は極少ない。この層の上面を厚さ約１㎝の黒色炭化物層が覆い、さらに無遺物の明灰白色シルト層が厚さ20㎝前後堆積する。同層は県道東側の54区以東に普遍的にみられるものに対応すると考えられる。土器は弥生時代後期前半猫橋式期に属する。なお、本落ち込み付近で、時期別の遺構分布に差があるところから、埋積後も自然地形の境目になっていた可能性が強いと考えられる。

噴砂　57区中央部で黄灰白色シルト層下に噴き上げた粗砂層の帯を検出した。北半部を断ち割ったところ、N60°Wの方向を示していた。噴砂は、下層の粘性を帯びた暗灰白シルト層を切っており、同層は弥生時代後期中頃の遺物を含むこと、黄灰白シルト層は弥生時代終末の月影式期の遺構面となること、後期後半の法仏式期の遺構と黄灰白シルト層との確実な切り合い箇所はないが、同期の遺物は同層の上面で出土することから、ほぼ後期後半の古い時期に形成されたと推定する。同様の遺構は43区ＳＫ－12の底面でもみられたが、ここからは近世の土器が出土した。噴砂は地下水の吹き上げに伴うものとみられるが、自然湧水（自噴）によるものか、地震等の一時的要因によるものかはわからない。

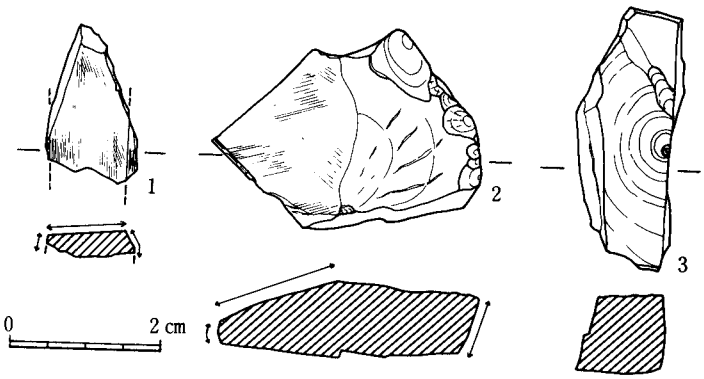
第5章　遺　　物

遺物図（第19〜29図）にしたがって述べていく。

ＳＩ－02　遺物は、検出面で小片が多量出土した他、床面上の黒色炭灰層上面で、北東側から一括廃棄されたとみられる土器群が出土した（第19図1，3〜7，9，11）。器種が高杯と器台に限定されるのは興味深い。二次加熱を受けた破片が多く、1や11のように黒斑が白色化して不自然な接合状態を示すものもある（写真図版9・10）。1は杯部が口径31.0cmと大形で浅い特徴をもち、杯底径がやや小さく深みを持つ3とともに、加賀市敷地町後方遺跡（小森他1982）5区南半最下層に類品がある。本例はともに杯部を赤彩文様（図化不能）で飾っている。4・5は無段脚高杯の脚部で、形態はやや異なるが両者とも柱状部が長い特徴をもつ。11の器台は、押水町宿東山遺跡(北野他1987)ＳＧ－02に類品があり、それよりも各部の発達が弱く重厚な作りとなっている。以上からこれら一括廃棄の土器群は、ほぼ敷地町後方遺跡の主要なものに併行し、宿東山遺跡では古相の6号住段階に併行ないしはやや古い様相をもつと考える。弥生時代後期後半法仏式の中葉前後に位置付けられよう。埋土中の他の破片もこれに矛盾するものはない。

石製品には台石2点と緑色凝灰岩片3点がある。台石は土坑上面の竪穴埋土から出土した。第20図7は直方体状で3点に分かれて出土したが、欠損部が本来の使用時にあったかはわからない。表裏および側面に滑らかな面をもつ。石質は、金雲母とカクセン石を多量含む石英安山岩である。現存の法量は20.4×16.6×11.1cm、5.01kgである。もう1点は21.6×21.4×11.3cm、4.96kgを測る。縞状構造の発達した流紋岩で、板状剥離が激しく表面が風化していることもあって使用痕は確認できない。

緑色凝灰岩は、いずれも拡張した竪穴の南側で、1・2が上層の検出面、3が埋土中から出土した。1は破損品であるが3面を研磨しており、板状ないしは直方体状であったとみられる。淡緑色で比較的緻密な質感がある。幅1.2cm、重量0.77g。2は完存品で、荒割後の研磨途中とみられる。一側縁には刃潰し状の小さな剥離痕が認められる。石質は縞状模様はあるが、深緑色の緻密なものである。剥離面は安山岩状を呈する。重量10.45g。3は直方体に形割りされた素材とみられる。研磨痕はない。石質は鮮やかな緑色で剥離面に光沢をもつような緻密な質感があるが、白色軟質の部分が薄く縞状に貫入する。3.5×1.4×1.2cm。重量6.52g。本遺跡ではこのほか緑色凝灰岩片が6点出土している。研磨したものはないが、形割や調整を加えた玉素材とみられるものが2点含まれる。



第18図　ＳＩ－02出土緑色凝灰岩片

その他、メノウとみられる石材が2点出土した。1点は拡張区の埋土出土で、表面が均等に風化・

摩耗しており自然の転石ないしは加工前の素材とみられる。もう1点は北側の土器類とともに一括出土（第14図8）したもので、三角柱状に割れており、加工を意図したものと推定される。長さ4.0cm、重量23.42g。

ＳＫ－26　第20図8は法仏式系の甕形土器である。口縁部外面は板状工具で擬凹線文を施し、体部はヘラ削りで薄く仕上げる。土坑内では月影式期の土器が多く出土している。その他、小指指頭大の軽石一点（0.56g）が出土した。全面に研磨面の使用痕をもち、使い込んで小さくなったとみられる。

ＳＫ－28　月影式の甕形土器が出土している（第20図9～12）。

ＳＸ－01　第21図1は甕蓋に転用している。3・4は頸基部に突帯をもつ大形壷である。5は肩部に10条の細かい櫛描波状文を巡らす。6はタタキ状の粗いハケをもつ台付甕の台部である。7は近江の受口状口縁の系譜を引く甕形土器で、体部内面はハケ後ナデとする。ほぼ法仏式におさまる土器群であろう。

ＳＤ－04　溝の時期のものではないが月影式期の小型鉢ないしは小型高杯が出土した（第21図8）。

第21図9は47区出土で体部外面にタタキ目をもつ甕形土器である。口縁部はタタキの後にひねり出している。体部内面はハケかナデである。畿内の弥生Ｖ様式系の甕とみられ、本遺跡では白江式期に属するであろう。

ＳＸ－02　第22図に示す3点が一括出土した。いずれも一部を欠く。1は長胴の長頸壷で頸部にはヘラ描きの記号文と赤彩文がある(写真図版11)。記号文は長方形の枠内に下向きの綾杉（羽状）文を施す。赤彩文は記号文から90°左へ振った位置にあるが、形は明瞭ではない。ミガキは胴部上半までである。2は内傾幅広の口縁端部をもった瀬戸内系の甕形土器である。口縁端部には2条の凹線文を施し、胴部は外面がタタキ後ハケ、内面はハケ後ケズリとする。ケズリは頸部の屈曲部まで至らず下がった位置までである。底部外面もケズリとする。胴部下半～底部内面には、底部中央を除いて炭化物の付着が認められる（写真図版12）。3は在地系の甕形土器で、胴部は内外面ともハケ後ナデとする。口縁部内面の上部が受口状に内湾する特徴をもつ。現在、後期前半の土器編年は西念・南新保遺跡で試みられている（楠1989）が、各形式の組列までは明らかとなっていない。特にここにある長頸壷や在地系甕のあり方は不分明な点が多く現状での編年的位置付けは難しい。金沢市二口町遺跡（宮本1983）の竪穴住居跡の土器群に対比できるとみられるが、今後の資料の増加を待ちたい。

ＳＫ－17　器種及び個体数は、口縁部の個体識別（1／12以上）で、高杯2、小型高杯1、小型器台1、小型鉢1、尖底鉢1、中型壷1、中型甕11、小型甕5がある。高杯はいずれも濃尾地域に系譜をもつもので、第23図1・2は口縁端部を丸くおさめ、3は水平な面を持つ。8は丸みを帯びた平底の浅い小型鉢で、外面はミガキとする。近岡遺跡（栃木他1986）大溝に類品がある。9は器高約14cm、尖底ぎみの鉢で、底部付近の内面はケズリとする。孔は不明。10は二重口縁壷であるが、粗製で頸部以上の作りにも在地有段口縁壷の名残がある。14～16は小型甕でいずれもくの字口縁である。14・16は肉厚で、内面はハケ状具で掻きケズるような調整としている。

15の外面は粗いタタキ痕が残る。11・12は在地系の有段口縁甕で、球胴化傾向にあり、肩部外面にはヨコハケを施す。11の口縁上端内面の形態はＳＫ－19第25図８に通ずるもので、12は口縁部が外傾し、内面がくの字状になる当該期に通有の形態である。13は近江受口状口縁甕の系譜を引くもので、胴部外面は粗いケズリ状のハケ、内面はハケである。第24図１～３はくの字口縁甕で、いずれも作りは肉厚で粗い。１は頸部のくびれが弱く長胴で、２は逆に頸部がしまり球胴傾向を示す。３は胴部外面を横方向のケズリとし、粗いタタキ目を残す。ＳＫ－22出土の第27図20とタタキ原体は類似する。胎土は0.5㎜前後の均質な砂粒を多量混和するもので本遺跡の中では異質である。４は球胴ぎみで、作りは比較的薄く、外面は条線間隔の粗いハケ状具の調整とする。ＳＫ－22出土の第27図９、14、17、18も同様の工具を用いており、濃尾～近江地域の影響下に製作されたものとみられる。５は台付甕の台部で、同一個体とみられる胴部以上は、口縁部が端部にほぼ水平な面を持つくの字口縁で、胴部外面はタタキ？後粗いハケ、同内面はケズリとしている。くの字口縁甕には頸部のしまりの強いものと弱いものの２種がある。

本土坑では甕の形式がくの字口縁甕が卓越する点に特徴がある。中型甕では、11個体のうち、在地系有段口縁甕が４個体（図示した２個体の他はいずれも口縁部のみで遺存は１／12）の他は、くの字口縁甕が６個体、受口状口縁甕１個体である。くの字口縁甕は１個体のみが能登系の可能性を残すが、他はいずれも粗いハケを特徴とする近江北部～濃尾地域に系譜をもつものと考えられる。受口状口縁甕についても同様の系譜とみられる。小形甕は５個体ともくの字口縁甕で、中型甕に準じた特徴をもち、系譜についても同様に考えられる。在地系有段口縁甕の口縁部形態や、各器種の外来系土器のあり方から、白江式でも後半期の漆町遺跡６群土器（田嶋他1986）に併行するものと考える。当該期の新相とされる金屋サンバンワリ298土坑（田嶋他1988）では、在地系がほぼ半数近く存在するのに対して、本土坑では３割以下、残り７割程度がくの字口縁甕と受口状口縁甕であり、前掲地域からの影響が強く（在地性が弱く）、両者に地域差をみることができる。後述するＳＫ－22でもくの字口縁甕の優勢はかわらない。

ＳＫ－18　台付鉢、（台付）小型鉢、中型有段口縁壷、小型壷、中型甕、大型甕がある。台付鉢（第24図６）は口縁部の短いもので、脚は短い柱状部から屈折して裾は大きく開く。脚径約18㎝、脚高は約６㎝程度とみられる。７は内外面ともミガキ調整の薄手精製品で台付の可能性もある。中型甕は10個体（口縁部の個体識別、小片も含む）あり、うち９点は擬凹線文有段口縁である。ＳＫ－19やＳＤ－25に認められるような先細りの形態のものはなく、全般的に古い系統のもので占められる。第25図１の口縁端部内面の形態は、同図４、ＳＫ－28（第20図９）、ＳＤ－25（第26図８）に類似する。月影式でもＳＫ－19よりやや古い様相を指摘できる。

ＳＫ－19　台付鉢、（台付）小型壷、装飾器台、甕がある。台付鉢（第25図５）は口縁部の発達した深身のもので、脚は柱状部をもち高杯脚の旧形を残す。南新保Ｄ遺跡（平田1976）ＢＧ－20土坑出土品より古い段階のもので、御経塚ツカダ遺跡（吉田1984）82－２号住出土品に対比できる。７の装飾器台は垂下帯の径が9.8㎝と小さく、北安江遺跡（谷内尾他1985）Ｃ16溝上層に類品があるが、小形品の上限は月影式でも新しい段階とみられる（栃木氏教示）。８の甕は御経塚ツカダ遺跡82－１号住に類品を見い出せる。９は断面三角形の口縁帯に板状工具で弱い擬凹線

文を施したもので、宇気塚越遺跡３号住（西野1980）に類例がある。いずれも月影Ⅱ式（田嶋1986）の中で捉えられよう。

ＳＤ－25　西溝と東溝があるが、ここでは一括して扱う。第26図１・２は伝統的な高杯の系譜を引くものであるが、口縁基部付近の作りや杯部の法量は台付鉢の影響を受けているとみられる。３の有段口縁中型壷は、ＳＫ－18出土の第24図８に比べて、頸部が短く、口縁部への屈曲のあまいものとなっている。４～６は口縁部の外反、端部の先細り傾向がある。６の胴部は最大径が中位付近に下がり球胴化を示す。７は第25図９とともに河北潟北東縁～宝達山山麓地域に多くみられるものである。ＳＫ－19同様月影Ⅱ式期に属するとみられる。なお本遺構からは軽石２点（第26図９ほか）が出土している。ともに２～３㎝、4.49ｇ、3.61ｇと小さくなっており、９は全面に「擦り」の使用痕がある。なお、上面出土の10・12は白江式期のものであろう。

ＳＫ－22　土器は２層を中心に出土し、坑底付近に比較的大形破片が多かった。出土層位は観察表に譲り、ここでは出土品を一括して扱う。器種は口縁部の個体識別で、高杯（台付鉢）５、小型高杯１、小型器台１、中型器台２？、装飾器台１、小型鉢４、中型壷３、直口壷１、中型甕15、小型甕４がある。高杯は在地系の台付鉢が１個体（他に脚１）ある他は、濃尾系である。第27図３の一次調整は甕14・17と同じ粗いハケである。６の小型高杯は杯部椀形の濃尾系で、８・９？の直口壷も同様の系譜とみられる。10はくの字に開く口縁部に突帯を貼り付けて二重口縁としたもので、頸部の屈曲部に刻みを入れた突帯を巡らす。類品の少ないものである。中型壷にはその他、口縁部断面三角形の濃尾パレス壷の系譜を引くものが１点ある。甕は中小19個体のうち、在地有段口縁系が４（月影式期の混入品含む？）、くの字口縁能登系１、近江受口状口縁系２、その他のくの字口縁系12（胴部タタキのもの２）がある。台付甕の脚台は２点あり、いずれも14・17のような粗いハケ調整である。16は口縁端部を板状工具でケズるように面取りしたもので近江北部に類例のある技法とみられる。本土坑では、在地系甕は多くても２割程度とみられ、摂津など畿内周辺部に源流のあるとみられるタタキ甕を少量含み、大半を近江北部～濃尾北部系のくの字口縁甕が占めている。時期はＳＫ－17と同様に、白江式期でも新しい段階に位置付けられよう。

ＳＫ－23　第28図１は有段鉢形の高杯の系譜を引くもの、３は甕形の鉢とみられる。２の器台は受部と脚部の境が明瞭で、脚部は柱状部の形態を保つ。口縁部の類品は御経塚ツカダ遺跡82－１号住にある。月影Ⅱ式期とみられる。ＳＤ－29出土品もほぼ同時期と考えられる。

ＳＤ－28　第28図10は杯部が深身で有段部の短い高杯である。11は口縁帯に３条の凹線文を施す大型甕である。その他、小片であるが、口縁部に斜行の刻み、肩部に平行沈線を施す近江系受口状口縁甕が出土している。後期前半でも後半～法仏式の初頭頃に位置付けられようか。

Ｐ－32　第29図１は52区礎板柱穴群の下限時期を示す資料である。杯底部は長く、弱い外反傾向にある。立ち上がり部は短く立ち、端部は内面に肥厚せず水平な面をもつ。西念・南新保遺跡（楠1989）Ｊ区１号住などに類品があり、杯部の形態からみても、後期前半でもさほど新しくない段階のものと考える。ＳＸ－02と同期か。

54区下層　第29図２・３は灰白色シルト層の下面で出土した土器で、同層堆積時期の上限を示

す資料である。3は近江系受口状口縁甕の系譜を引くもので、口縁部は端部に面を持つが有段部は外反傾向にある。肩部の平行線と斜行刺突はハケ状の原体とみられ、施文は弱々しい。2はクシ状具による擬凹線文を口縁部に施した後、同内外面と体部外面をミガキとする。3は法仏式の古い階段の受口状口縁甕とみられ、2とともに同期の前半に位置付けられる。

胎土について

すべての土器についての統一的な観察ができなかったため、ここでは一部を抽出してその特徴を述べたい。肉眼と実体顕微鏡（6.3X～40X）で胎土中の含有物を観察したが、砂礫の岩石種の同定が十分できないため、主にその量、粒形、粒径と等質度、鉱物種に注目した。その他素地中に夾雑物として混入した珪質海綿の骨片（藤1987）の有無も観察した。

本遺跡の素地粘土の質は大まかに2種がある。一つは、珪質海綿の骨片（以下「骨片」と略）を含むもので、素地がシルト質で表面は粉状に風化しやすく、黄～黄橙色に発色するものが多い。本遺跡周辺～能登地方の丘陵部の遺跡に普遍的に認められ、海成堆積土起源の成分を含む胎土とみられる。一方は、骨片を含まず、粒子が緻密で滑らかな質感があり、淡黄～灰白色の明るい発色のものである。両者の差は採取粘土の堆積環境に起因するとみられ、バラエティーがあって厳密には区分できないが、採取地点・層位を示すひとつの指標になる。胎土中の骨片の量を時期別に集計したのが第1表である。含骨片胎土は、法仏式期までは31点中1点とほとんどなく、月影式期には32点中13点（40.6%）と急増し、白江式期も44点中17点（38.6%）とほぼ同率を示す。法仏式期以後、月影式期に至って含骨片胎土が本遺跡へ急速に広まっていることがわかる。同様の変化がどの程度の領域で起こっているかは非常に興味深いが今後の検討課題である。ただ松任市法仏遺跡の資料を散見したところ、法仏式期には含骨片胎土がほとんど見られないのに対し、白江式期以降のものには比較的それが目につくことから、松任市北西平野部ではかなり普遍的な事象の可能性がある。第2・3表は含骨片胎土と器種の関係をみたもので、月影式期、白江式期とも高杯類の比率が若干高くなっている。

後期前半　第22図2は粒形が角、1.0～3.0mmの不均質な砂礫を中量含む。白色・半透明の花崗岩質岩が多い。黒色、茶色等、有色の岩石は非常に少ない。ほかに0.2mm以下の均質な微粒砂を多く含み、堅緻な質感がある。本例は骨片を少量含む。砂礫は法仏式期以降の本遺跡の主体的なものではない。同図3は0.5～3.0mmの不均質な砂礫を中量含む。灰色、うす茶色など有色で円～亜角の流紋岩質岩が目立つ。1.0mm以下の焼土塊を少量含む。2でみられたシルト質の砂粒はほとんどない。

法仏式期　第20図2は粒径1.0～2.0mmのやや不均質な中～粗粒砂（細礫）を中量含む。（粗粒砂主体）。亜円～円の流紋岩質岩が主体で、灰色、暗灰色、灰白色の色調が多く、稀に紫色、薄茶色がある。その他半透明の石英があり、粒形は角～亜角である。粗粒砂の他には第22図2と同様、0.2mm以下の石英を主体とする均質な微粒砂を多量含む。黒雲母、輝石、角閃石も確認できる。シルト分は当該期の甕にかなり認められるが、第22図3、第29図3（1.0～2.0mmの軟質黒色

第1表　骨片含有胎土の時期別推移

時期	遺構	骨片の量				含骨片胎土の割合
		0	1	2～3	4～5	
～法仏式期	SX-02他	5		1		1/31（3.2%）
	SI-02	17				
	SX-01	8				
	小計	**30**	**0**	**1**	**0**	
月影式期	SK-28	3			1	13/22（40.6%）
	SK-18	2	3	2	1	
	SK-19	4		1	1	
	SD-25	7			1	
	SK-23 SD-29	3		2	1	
	小計	**19**	**3**	**5**	**5**	
白江式期	SK-17	16	1	4		17/44（38.6%）
	SK-22	11	4	6	2	
	小計	**27**	**5**	**10**	**2**	
合計		76	8	17	6	31/107（29.0%）

骨片の量

0…確認できない　1…極僅か　2…少ない　3…中量　4…多い　5…極めて多い

第2表　月影式期の器種と骨片含有胎土

器種	骨片の量				含骨片胎土の割合
	0	1	2～3	4～5	
高杯・鉢類	6	2	2	2	6/12（50.0%）
中型壺	1	1	1		2/3
甕類	12		2	3	5/17（29.4%）

第3表　白江式期の器種と骨片含有胎土

器種	骨片の量				含骨片胎土の割合
	0	1	2～3	4～5	
高杯・鉢類	10	1	6		7/17（41.2%）
中型壺	1			1	1/2
甕類	16	4	4	1	9/25（36.0%）

土塊多い）や高杯類ではほとんど含まない例もあることから、混和材として意図的に加えられた可能性がある。同図６は1.0～1.5mmの大きめの中粒砂を中量含む。角～亜角の石英、亜円の流紋岩質岩が主体でその色調は２と同じである。他に泥岩が極僅かある。本例及び同図５の胎土もシルト分を含み共通性が認められる。胎土の発色は淡黄～淡灰黄色と比較的明るい。以上は法仏式期の胎土の一例であるが、甕は一般的に、1.0～2.0mm前後の中～粗粒のやや不均質な砂礫を中量程度混和する例が多い。高杯類の砂礫の粒径は、0.5mm前後の細～中粒砂を主体とするが、含有量には少ない～やや多いといったバラエティーがある。砂礫の混和量が少なく、灰白色～橙色の発色をするものに焼土塊を含む例が多い（第19図２～４、６、７、10）。

月影式期　第20図10は粒径0.5～2.0mmのやや不均質な砂を多量含む。岩石種は黒灰色、暗灰色、灰色で亜円～亜角の流紋岩質岩が主体で、他に泥岩や微細なシルト分を含む。無色透明でガラス質の破面をもつ1.0mm前後の石英粒を少量含む。同図９は1.0～2.0mmの砂と約0.5mmの石英を主体とする均質な砂を含む。前者の砂は10と同様である。ガラス質透明石英は10よりも目立つ。同図12は９・10と同種の砂であるが粒径は1.0～1.5mmの比較的均質なものである。同図11は骨片を多量含む粉っぽい素地で、1.0mm前後のほぼ均質な砂を多量含む。赤褐色、茶色、うす茶色で、亜角の流紋岩質岩が多く、前３者とは異質である。第25図１は1.0mm前後のほぼ均質な砂を多量含む。角～亜角の石英、流紋岩質岩があり、前者は半透明、後者は第20図９～12と違って、灰色、灰白色の明るいものが多い。同図８も比較的類似した砂の組成で、１mm前後の赤色粒を中量含む。第26図５は0.5～1.0mmの均質な砂を中量含み、円～亜円の茶色系流紋岩質岩が多い。同図８は1.0mm前後の均質な砂を多量含む。半透明の石英、亜角～亜円で灰色主体（他薄茶色）の流紋岩質岩が多い。シルト分が少なく、素地は滑らかな質感がある。第25図９は骨片を中量含む粉っぽい胎土で、約1.0mmの均質な砂を多量含む。亜角～亜円で灰色系の流紋岩質岩を含むが、赤茶色を帯びたものが特徴的にみられる。0.2mm程度の石英主体の微粒砂（シルト分）が非常に多く含まれる。0.5～1.0mmの赤色粒を中量含む。第20図11と類似した胎土である。同図２は骨片を中量含む粉っぽい胎土で、1.5～2.0mm程度のやや不均質な砂を含む。石英・長石（・黒雲母）のかみ合った花岡岩質岩を少量含み、灰白色など白っぽい流紋岩質岩を多量含むのを特徴とする。シルト分を中量含む。

本遺跡の月影式期の甕類で骨片を含む例は、第20図11、第25図２・３・９、第26図６の５例である。口縁形態は擬凹線文有段口縁系が３点、無文有段口縁系が２点であるが、これらは口縁部が外反して先細りする擬凹線文有段口縁の典型的な「月影型甕」とは形態的にはやや異質なものばかりで、逆に、第25図８・11や第26図４・５などそれに対比できる口縁部のものでは骨片を含むものは確認できていない。「月影型甕」のバラエティーと生産地を考える上で興味深い点である。砂礫では、１mm前後の均質な砂を多量含む点に特徴があり２mm以上の粗粒砂を多量含む例は極少ない。シルト分の有無と量にはバラエティーがある。砂礫の種類では、①第20図９・10のような黒灰色、暗灰色など雑多な濃い色調の円い流紋岩質岩と泥岩と透明石英を特徴的に含むもの、②第26図５のような円い濃い赤茶色の流紋岩質岩を多く含むもの、③第20図11、第25図９のように亜角～亜円の雑多な色調（赤茶色目立つ）の流紋岩質岩を含むもの、④第25図１・８のように

茶色のものも含むが、灰色と灰白色など白っぽい流紋岩質岩を含むもの（発色は淡黄色の明るいものが多い）⑤第25図２のように、白っぽい流紋岩質岩に花崗岩質岩を含むもの、などに大きく分けられる。後述する屋越川河口や浜竹松遺跡地山採取の砂礫観察及び法仏式期の甕の胎土の観察からみて、それらに最も近い砂の組成のものは、①の一群ではないかと考える。②・③もそれに近い。⑤は本遺跡より北側の地域に多い砂の可能性がある。

本遺跡の当該期の甕は、擬凹線文有段口縁系が卓越しており、無文有段口縁系その他の割合は非常に少ない。第25図３、第26図６、７（砂礫は①）などで、骨片を含む胎土のものが多く、骨片の含まない④の胎土の例は確認できていない。

白江式期　第23図11は1.0～1.5㎜前後のほぼ均質な砂をやや少量含む。輝石、角閃石、透明石英が目立ち、１㎜前後の赤色粒を中量含む。砂礫は半透明の石英、灰色系の流紋岩質岩を主体とする。同図12は骨片を中量含み、シルト分を多量含む粉っぽい胎土で、1.0～2.0㎜のやや不均質な砂を含む。亜角～亜円の流紋岩質岩が多く、粉っぽく風化したように一部がうす赤（茶）味を帯びたものが目立つ。同図13は0.5～2.0㎜の不均質な砂を中量とシルト分を多量含む。前者は半透明の石英と亜角～亜円でうす赤茶色味を帯びた流紋岩質岩が主体である。その他、長0.5㎜以下の柱状の輝石、角閃石が多い。第24図１は0.5～3.0㎜の不均質な砂を中量含む。シルト分は多い。半透明の石英と角～亜円の灰色系の流紋岩質岩を主体とし、赤味を帯びたものも少量ある。同図２も同様の胎土である。第23図16も0.5～3.0㎜の不均質な砂を特徴とするもので、0.5㎜前後の透明石英を中量含む。第24図３は0.5㎜前後の均質な砂を極多量含む。透明石英が多く、輝石、角閃石を含む。0.5～1.0㎜の流紋岩質岩を中量含む。石英粒が卓越するよく淘汰された細かな砂で、第23図15、第27図９とともに特徴的な胎土である。砂丘砂ないしは地山の均質な細砂を混和したものか。第27図13・14・16・17は0.5㎜前後の均質な砂を中量（第24図３などよりは少ない）含むもので、骨片を少量含む。透明石英が目立ち、17は角閃石が多い。流紋岩質岩は第24図３などより多く（石英の頻度が低い）、色調等は第24図１・２に準ずる。第27図18の脚台も同様の胎土である。第27図11は多量のシルト質砂と1.0～3.0㎜の不均質な砂（亜角の流紋岩質岩）を少量含む。第27図10は1.5～2.0㎜の粗粒の砂を中量含む。前掲の灰色主体でうす茶色を含む流紋岩質岩である。石はぜが顕著に認められる。スサ状の植物繊維とみられる痕跡（0.5×1.5㎜～2.0×7.0㎜）が数多くあり、混和した可能性が考えられる。

白江式期の甕の胎土は、比較的形式に対応したかたちで大別できる。月影式系の２点の擬凹線文有段口縁の甕は、砂礫の粒形や均質度、量において、月影式期の規範からはややはずれたものとなっており、時間的な推移によるものかともみられる。月影式期の③ないしは④の系譜をひく砂の組成とみられる。新たなくの字口縁系では、①多量のシルト分と中粒～粗粒の不均質な砂を中量含むもの、②0.5前後の石英の卓越した均質な砂を極多量含み、透明石英の目立つもの、③②と似るが流紋岩質岩が目立ち、0.5㎜前後の均質な砂を中量含むもの、などがある。流紋岩質の色調は、月影式段階のようなバラエティーはなく、同期の①や⑤のような例はみられない。

ここで本遺跡周辺で採取した砂礫のあり方についてみておきたい。第１は屋越川河口右岸の浜で採取した砂礫で、粒径１㎜前後で亜角～亜円の流紋岩質岩を主体とし、黒っぽい泥岩や半透明

の石英などがある。流紋岩質岩の色調は雑多で、黒灰色、灰色、灰白色、うす緑色、茶色、うす茶色、紫色などがあり、比較的色の濃いものを含むのが特徴である。他に透明石英が少量ある。月影式期の①や法仏式期の甕の胎土に共通性が認められる。第2は本遺跡の南西約600mの浜竹松遺跡の地山砂層から採取したもので、前者と共通性はあるものの、黒灰色など濃い色調のものは少なく、灰色系が主体で、粒形は相対的に角ばっている。

最後に、甕の胎土の時期的な特徴を整理しておきたい。法仏式期とそれ以前は、粗粒砂を含む不均質な粒径の砂礫を中量含み、シルト分を含む例も当初からある（外来形式？）。月影式期の擬凹線文有段口縁甕は、不揃いの粒径のものもあるが、形態的に安定したものでは、1㎜前後の均質な中粒砂を多量含む特徴がある。白江式期の同系統の甕もその伝統を引くが、粒径や均質度、量の点においてややその規範が緩んだものとみられる。外来系譜のくの字口縁甕では、多量のシルト分と粗粒砂を含む不均質な中量の砂礫からなる一群と0.5㎜前後の均質な細粒砂を極多量または中量含む一群がある。後者は形式に対応した新しい砂礫の含有形態で、その初現の時期と系譜は興味深い。第8図4のような布留甕の古いものにも認められる。シルト分は月影式期の含有砂礫の細かい例では、定量的に認められない例が多く、白江式期の細粒砂を極多量含むものでもほとんど認められない。おそらくは焼き上がりや成形時の強度などと関連するもので、月影式期以降の一部は均質な細粒砂を多量混和することでその必要性をなくしたものと推定する。これらの差違や変化は日常の土器の観察で誰もが感じていることであろうが、いずれにしても、含有砂礫のパターンと形式とは一定の対応関係にあることは間違いない。

土器の生産→供給→消費形態を探ることは時代を問わず手工業生産史研究の重要な課題のひとつである。それに関して、胎土研究が従来の形態主導の研究に新たな道を開くことは疑いなく、近年各地でその研究が盛んである。本稿は時間的な制約などから極一部を垣間見たにすぎない。月影式甕の素地や砂礫の差が何に起因するか、今のところ明確な見通しはない。どのように粘土を採取し、混和材を加え、焼成したかという基本的なことや、土器製作がどのような単位で行われたか、どのような供給体制にあったのか、分からないことばかりである。擬凹線文有段口縁甕を製作したあるグループが同時に無文有段口縁系その他をどの程度作ったのか（全く作らなかったのか）、他の器種はどうか（器種分業はあるのか）、また、法仏式期以前には含骨片胎土がほとんどなく、月影式期以降一定量出現することを、供給状況の変化としてのみ捉えられるのか、集落内部の生産状況の変化なのか、など数多くの問題点を指摘できる。これらを考えていく上でも今後、各遺跡の個々の土器の胎土を端念に調査していく必要があろう。

（注）様々な色のガラス質の石基の中に石英の斑晶が認められるようなものを一括して流紋岩質岩とした。透明石英をかむものがある。粒形は円味を帯びたものが多い。認識不足からの間違いも多いと思う。花崗岩質岩としたのは、白色の長石と石英がかみ合っている（黒雲母のみられるものもある）もので、長石のへき開面がみえて粒形は角ばっている。白色で風化したとみられる長石もある。灰白色の流紋岩質岩と誤認している例もあるかと思う。その他、安山岩や泥岩、チャートなども認められた。輝石・角閃石は普遍的にあり、粒径の細かい砂を含む高杯類や甕などに多く認められる。第21図5は輝石・角閃石を多量に含み、0.5㎜以下の透明ガラス質の薄片（火山ガラス）を極多量含む特異な胎土である。砂礫観察には一部奥田尚氏の御教示を得ている。

古代・中世の遺物

図化しなかったが写真図版19に示した遺物が出土している。古代では須恵器が18片出土した。大半が40～43区で、8世紀末～9世紀前半に比定できる杯Aが2点ある。その他4区で同期の盤A1点がある。押水・高松窯産、南加賀窯産もあるが、能美窯産が主体を占める。末窯産とみられるものはない。

中世の遺物は40～41区の旧河道を中心に出土した。中世陶器では珠洲が10片、加賀3片、越前2片がある。珠洲は甕4片、小壷1片、鉢5片で、時期のわかるものはいずれも15世紀前半～中頃のものである。加賀・越前はいずれも甕の体部片で時期はわからない。後者の2点は陶製円盤に加工されている。その他、13世紀後半頃の青磁碗、15世紀半ば～16世紀前半頃の瀬戸灰釉皿・鉢や鉄釉瓶、青磁輪花皿などが出土している。旧河道からは他に近世（18世紀頃）の肥前系陶器も少量出土している。

引用文献

北野博司他　1987　『宿東山遺跡』石川県立埋蔵文化財センター

楠正勝他　1989　『金沢市西念・南新保遺跡Ⅱ』金沢市教育委員会

小森秀三他　1982　『敷地町後方遺跡』加賀市教育委員会

田嶋明人他　1986　『漆町遺跡Ⅰ』石川県立埋蔵文化財センター

田嶋明人他　1988　『漆町遺跡Ⅱ』石川県立埋蔵文化財センター

栃木英道他　1986　『近岡遺跡』石川県立埋蔵文化財センター

西野秀和　1980　『津幡町谷内石山遺跡』津幡町教育委員会

平田天秋　1976　「金沢市南新保D遺跡」『北陸自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』　石川県教育委員会他

藤　則雄　1987　「宿東山遺跡とその周辺の地質と古環境」『宿東山遺跡』石川県立埋蔵文化財センター

前田清彦　1988　『松任市竹松C遺跡』松任市教育委員会

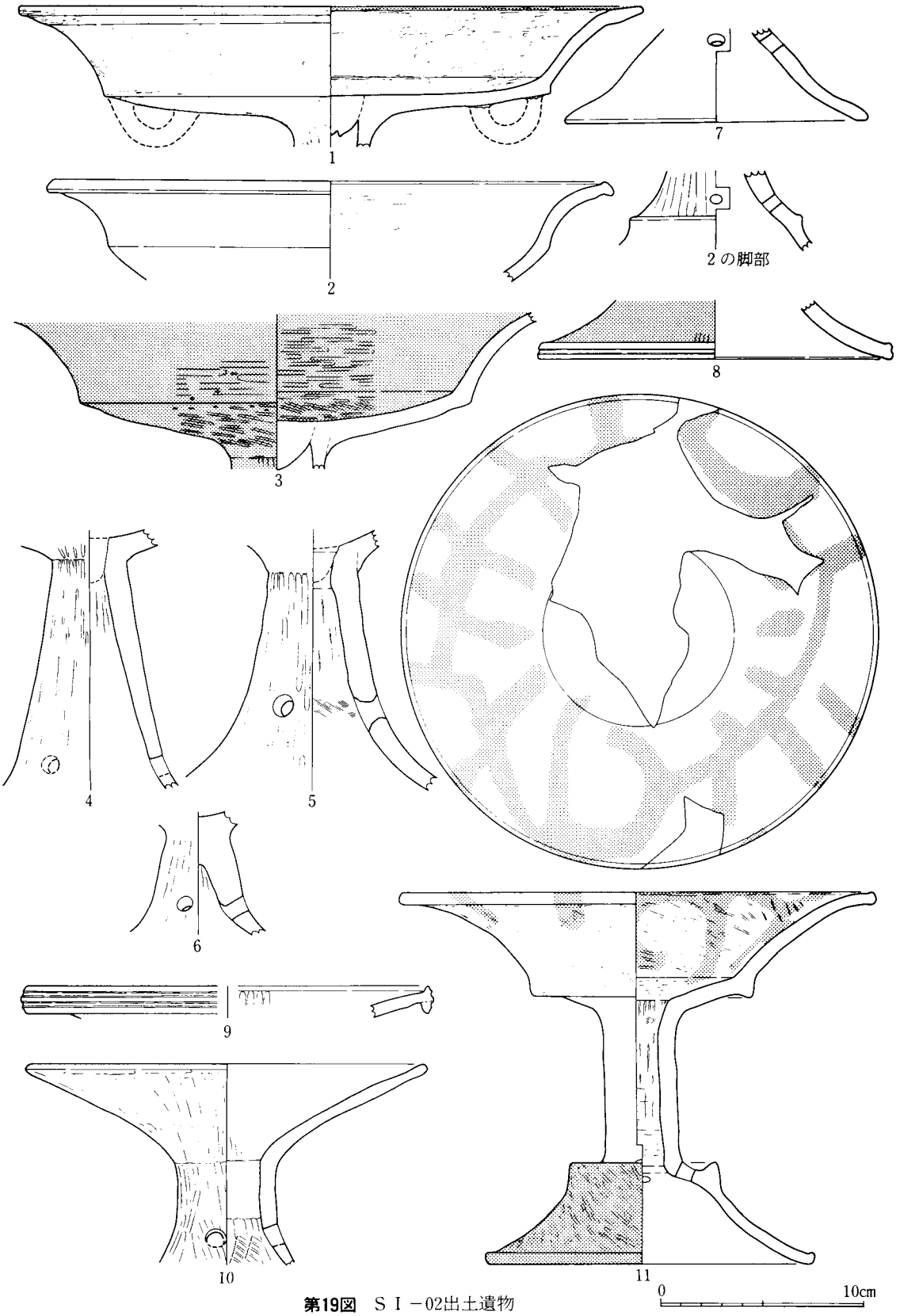
宮本哲郎　1983　『金沢市二口町遺跡』金沢市教育委員会

谷内尾晋司他　1985　『金沢市北安江遺跡』石川県立埋蔵文化財センター

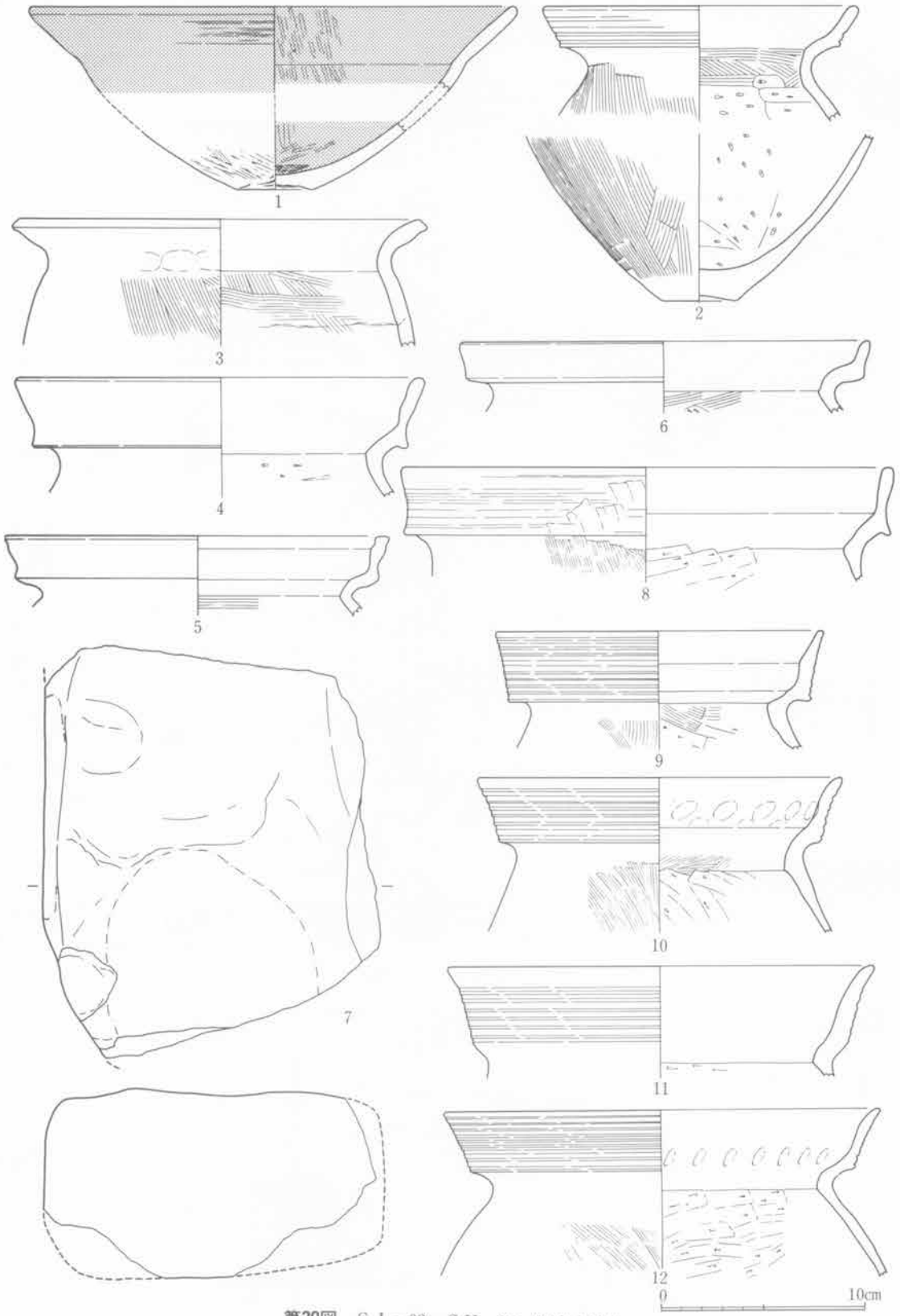
吉田淳　1984　『御経塚ツカダ遺跡発掘調査報告書Ⅰ』野々市町教育委員会

四柳嘉章　1970　「石川県石川郡松任町倉部出土の壷棺」『石川考古学研究会々誌』第13号　石川考古学研究会

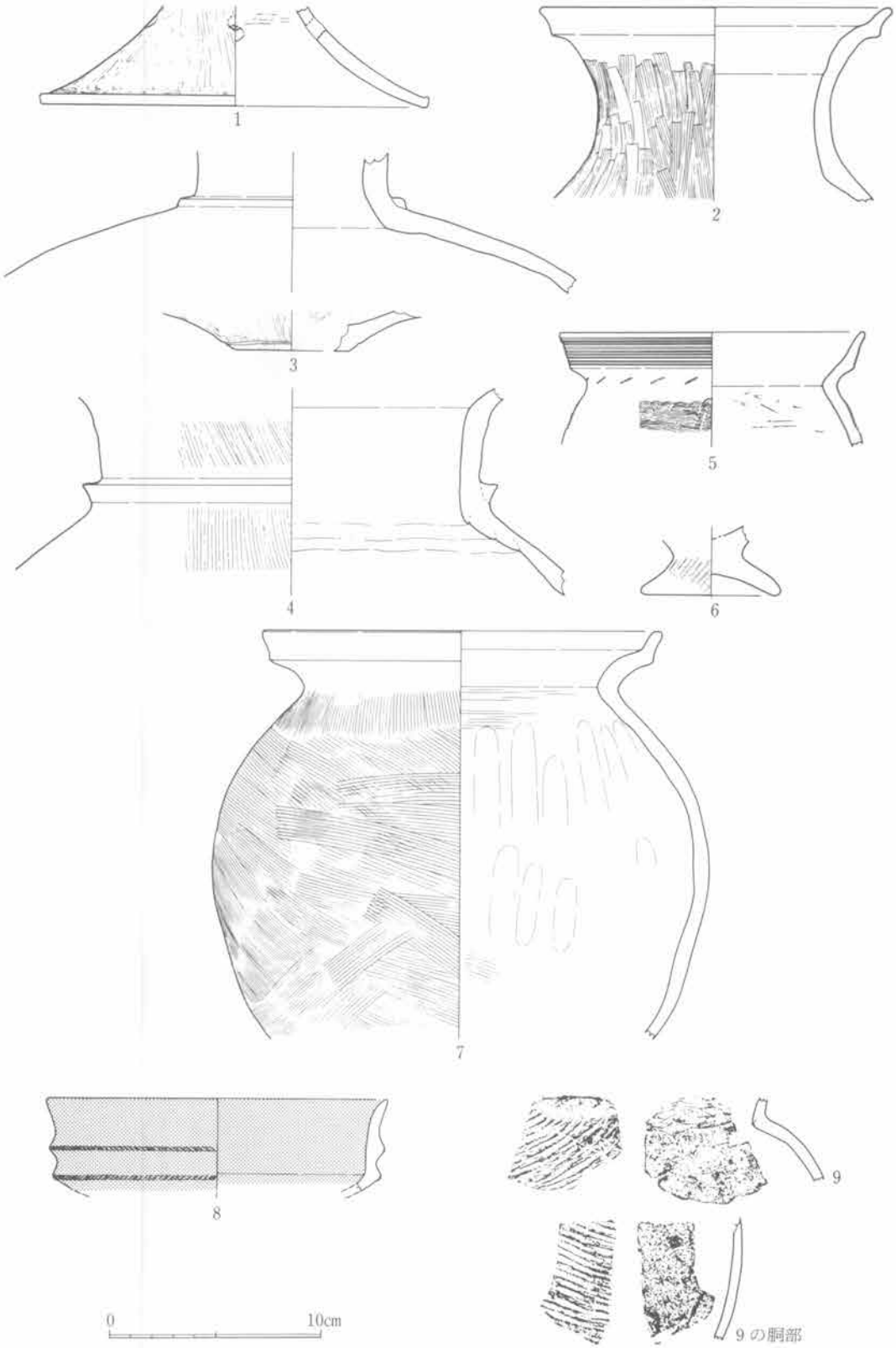
四柳嘉章　1971　「竹松遺跡出土の土器」『土師式土器集成本編Ⅰ』東京堂出版



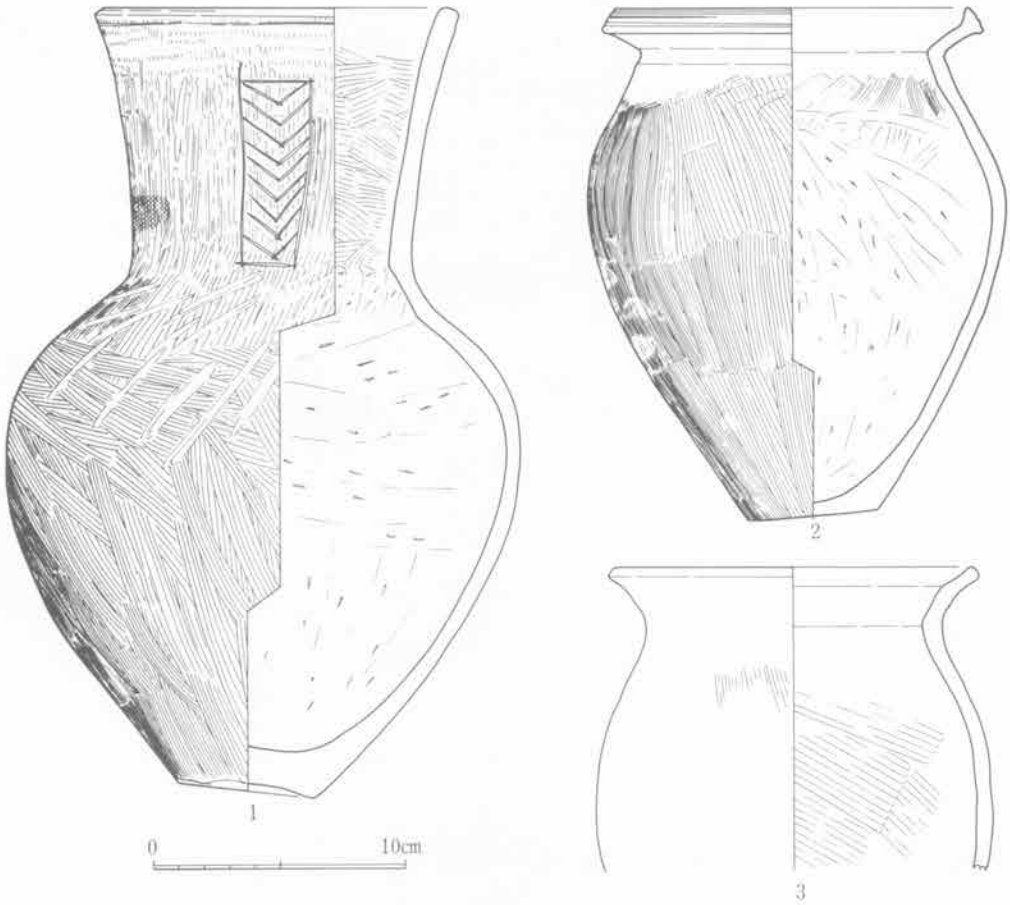
第19図　ＳＩ－02出土遺物



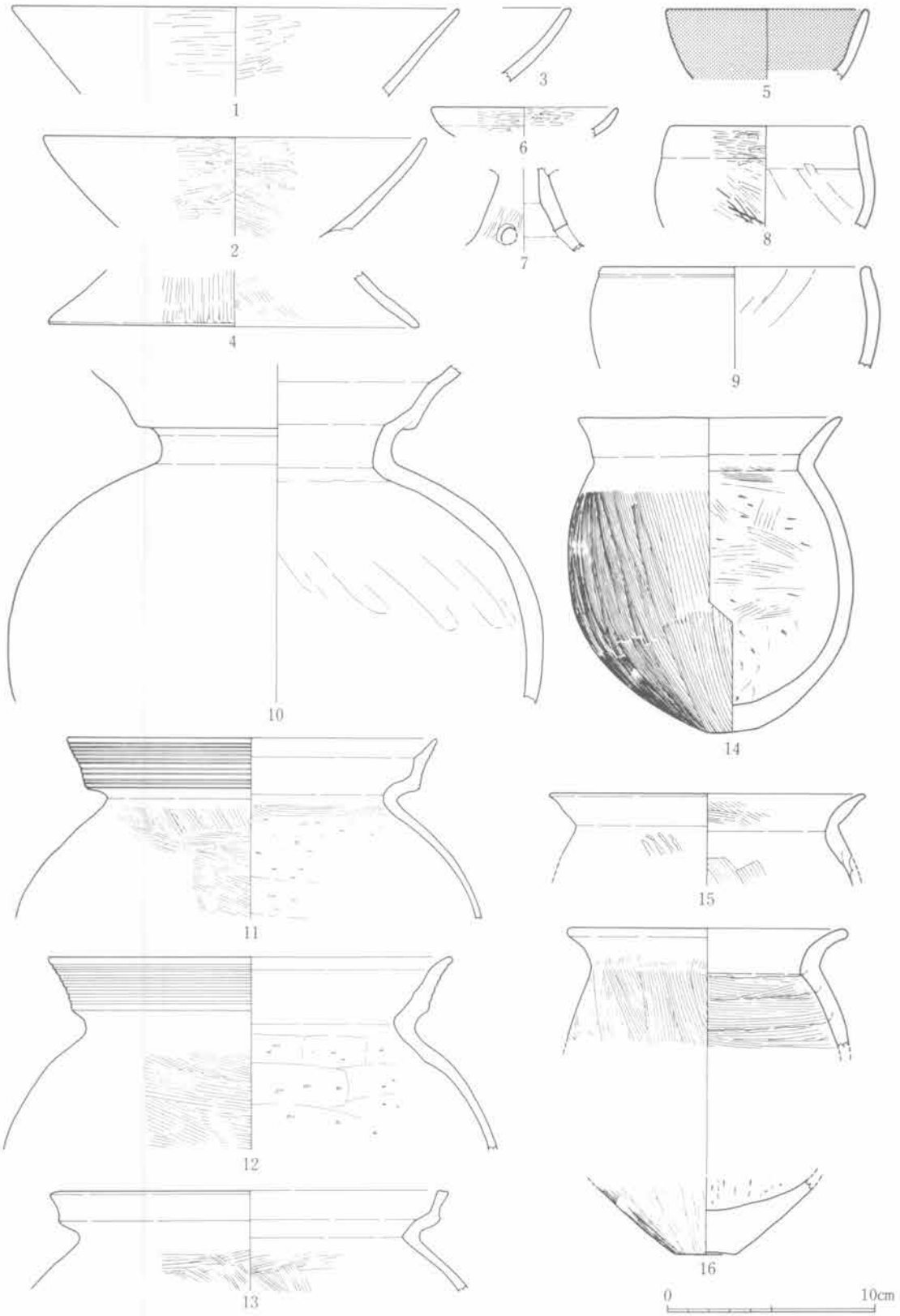
第20図　ＳＩ－02、ＳＫ－26・28出土遺物



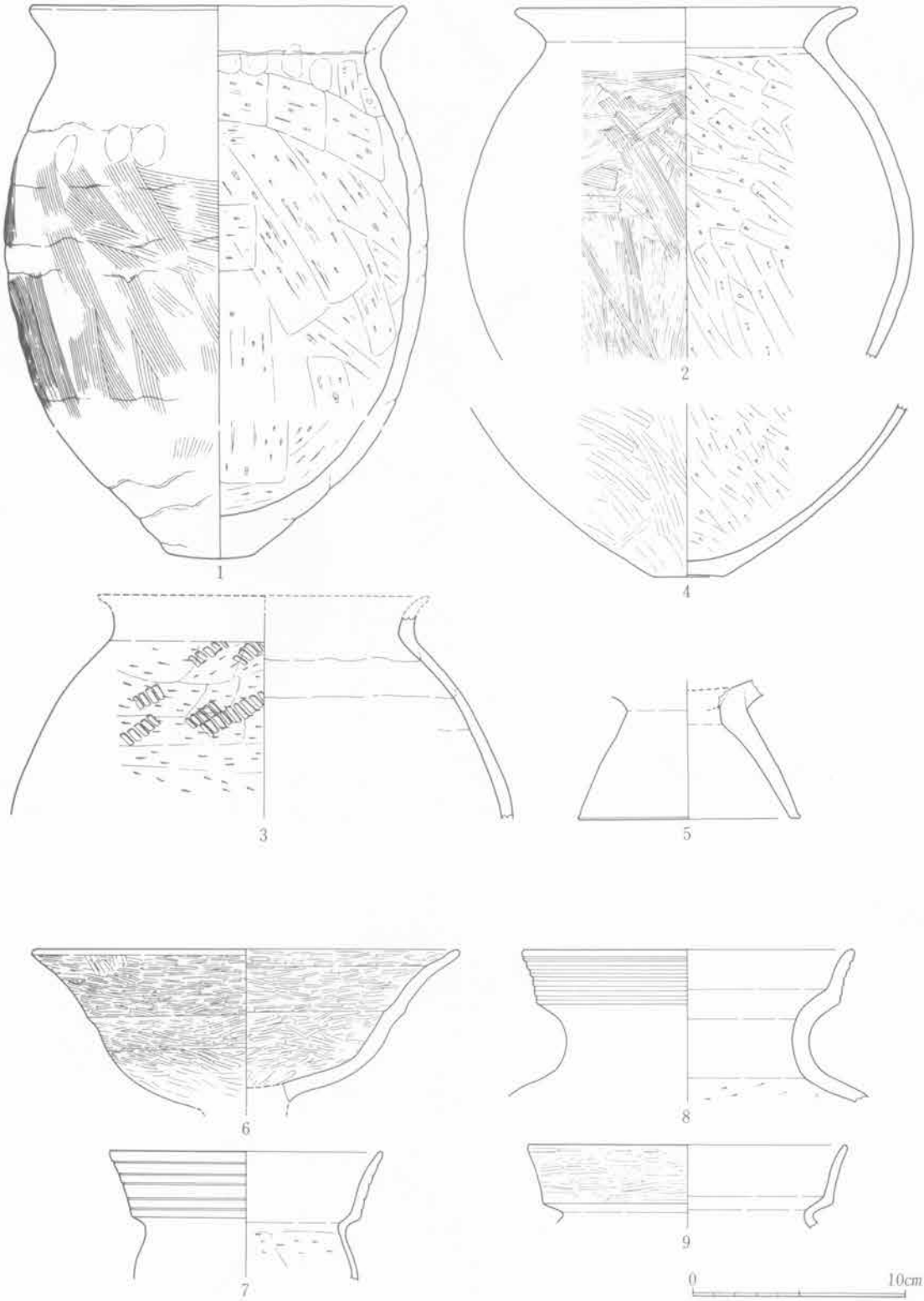
第21図　ＳＸ－01、ＳＤ－04他出土遺物



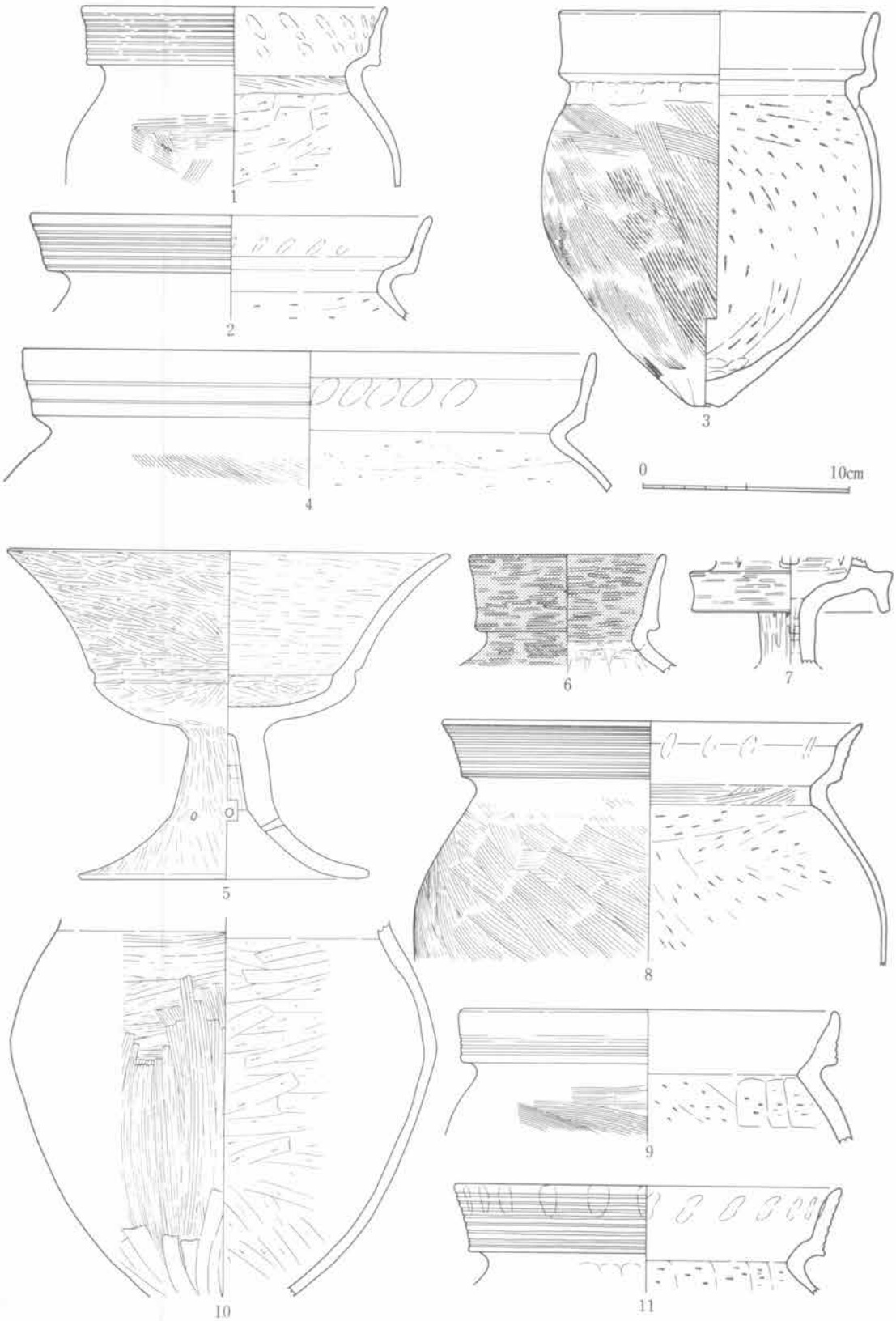
第22図　ＳＸ－02出土遺物



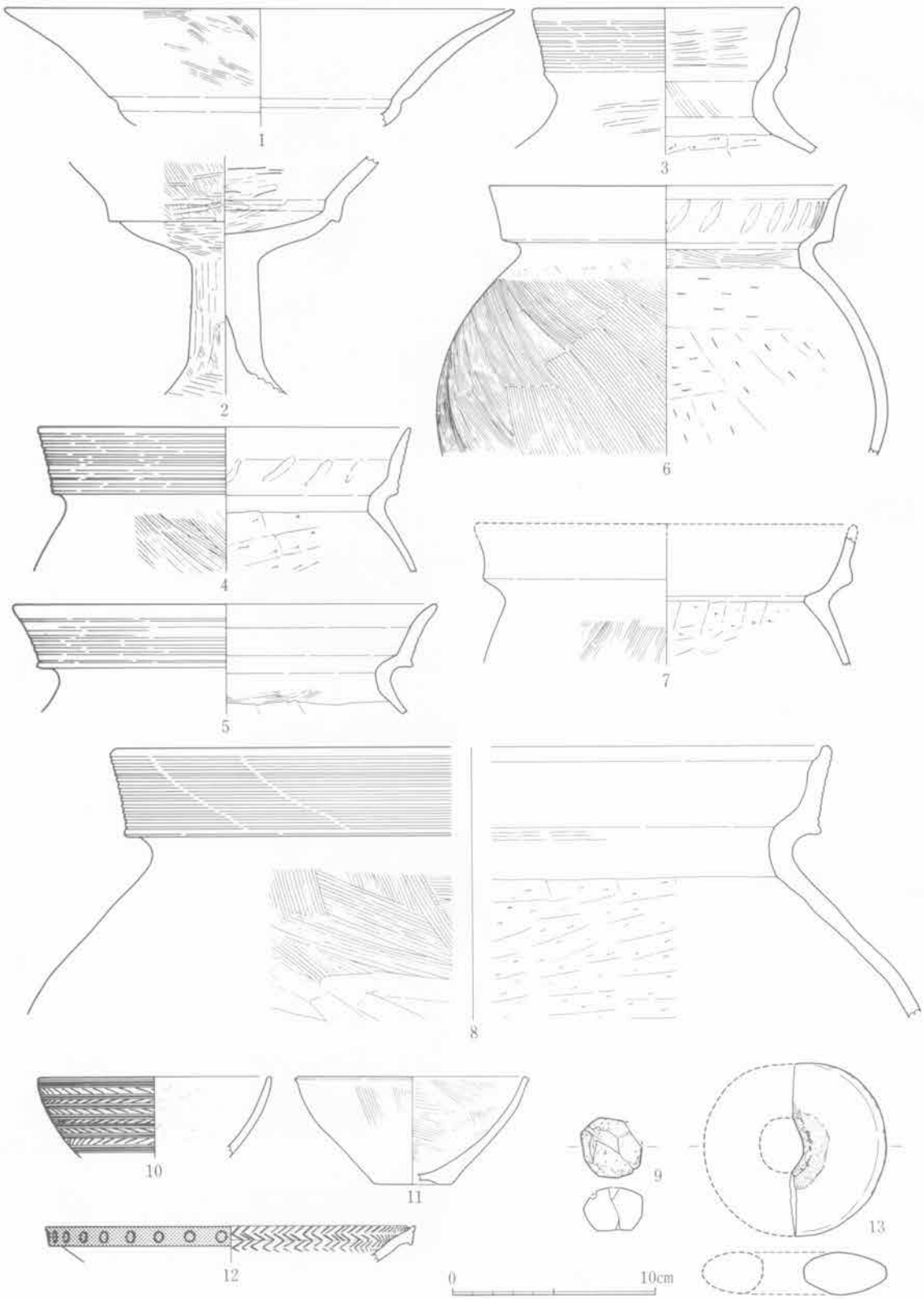
第23図 ＳＫ－17出土遺物



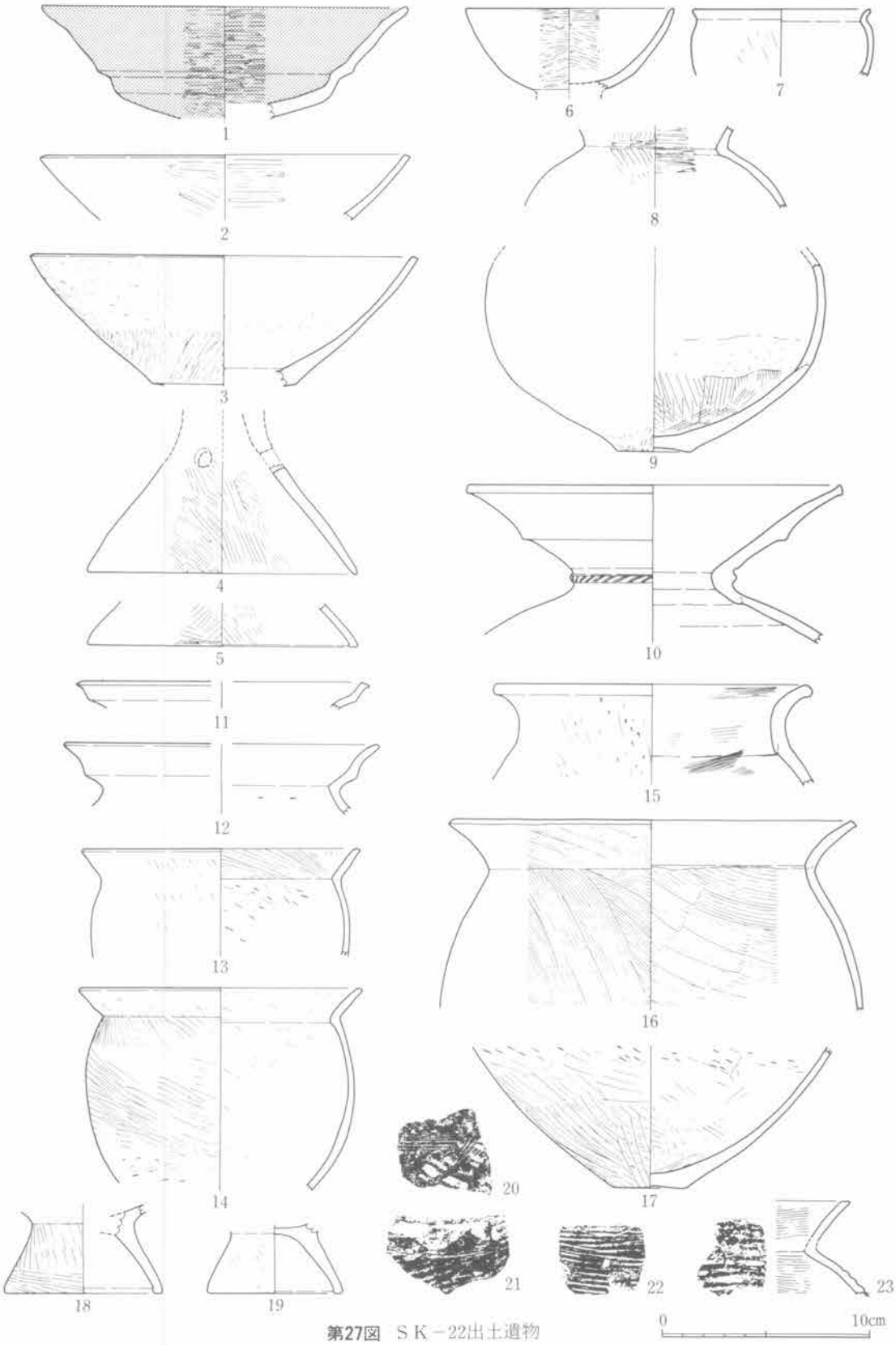
第24図 ＳＫ－17、18出土遺物



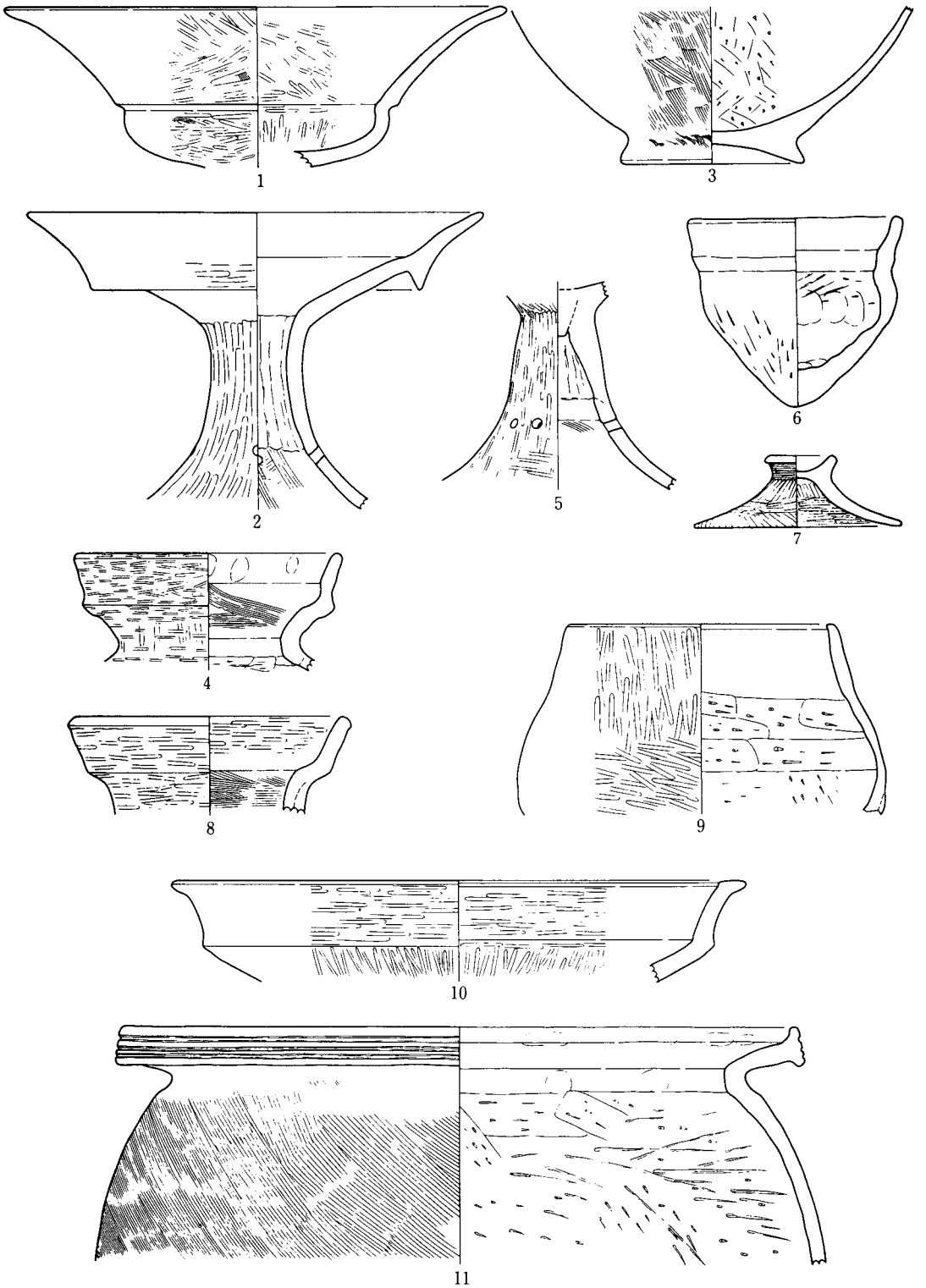
第25図 ＳＫ－18、19、20出土遺物



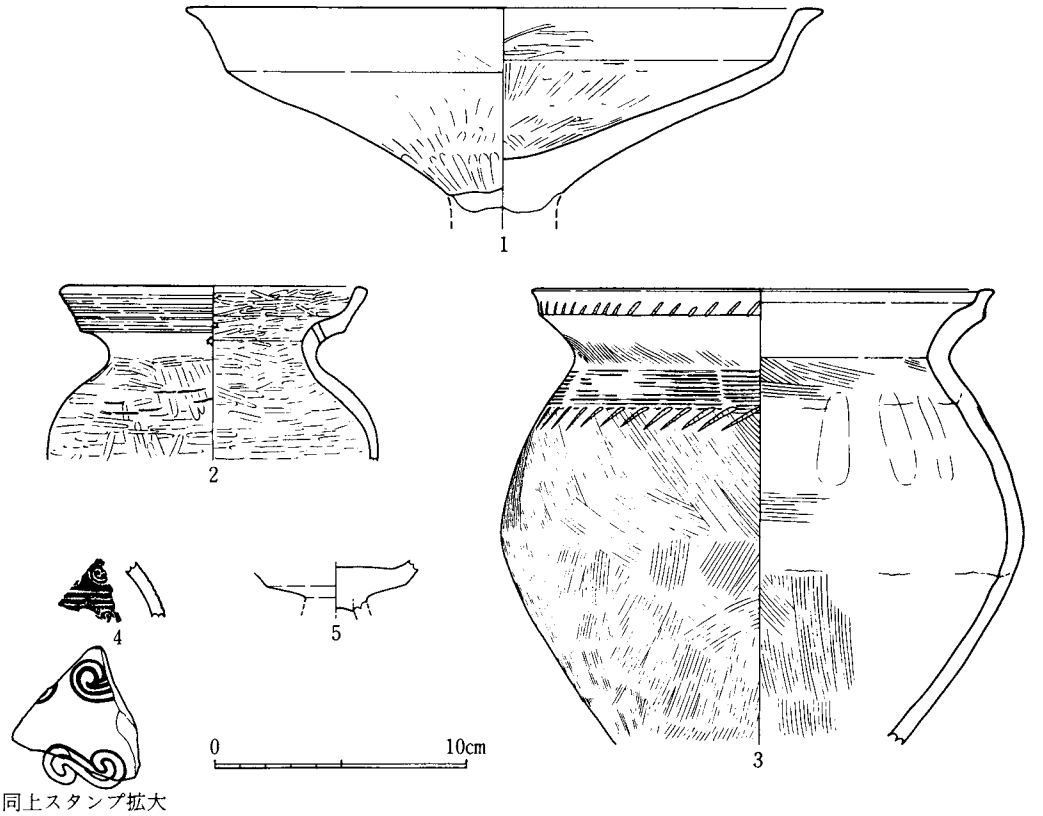
第26図　ＳＤ－25他出土遺物



第27図　ＳＫ－22出土遺物



第28図　ＳＫ－23、ＳＤ－27～31出土遺物　0　10cm



第29図　P32他 出土遺物

遺物観察表

第19図

番号	遺構層位	器種	調　整　等	遺存	色調	法量（cm）
1	SI−02 1,2,10,11, 12,15	高杯	杯部内外面ミガキ，口唇部赤彩，杯部外面赤彩文様（図化不能），破片二次被熱	ほぼ完	淡黄	口：31.0、 杯部高：5.5
2	SI−02拡 検出面	高杯	杯部内外面・脚部外面ミガキ	小片	淡橙灰	口：27.5
3	SI−02 17,拡検出面	高杯	杯部内外面ミガキ，杯口縁〜屈曲部ミガキの下にケズリ，杯底部一次調整のハケメ微かに残す，内外とも赤彩文様	口縁1/6 底部1/2	淡黄	口：約29〜30
4	SI−02 6,7	高杯	外面ミガキ，円孔３	ほぼ完	橙	
5	SI−02 19	高杯	外面ミガキ，脚内面ヨコナデ，円孔３	3/4	淡黄	
6	SI−02 16	脚部	外面ミガキ，円孔３	ほぼ完	灰白	
7	SI−02 17	脚部 （器台）	調整，孔数不明，二次被熱	1/4	橙	脚：14.8
8	SI−02,拡 埋土，検出面	脚部 （器台）	外面ミガキ，内面ヨコナデ，外面赤彩文様，端部付近スス付着	1/5	淡褐	脚：17.5
9	SI−02 6	器台	内外面ミガキ，端部２条の沈線	小片	灰白	
10	SI−02 埋土,41区 包含層	器台	外面ミガキ，円孔3,甕蓋転用で二次被熱・スス，蓋口径約15cm	1/2	灰白	口：19.7
11	SI−02 3,4,11,12, 13,14,16, 柱穴，土坑	器台	外面・受部内面ミガキ，脚内面ヨコナデ，円孔４受部内外面・脚部外面赤彩文様，柱状部調整・赤彩有無不明，破片二次被熱，破片は細片化して散在（38片以上）	5/6	淡黄	口：23.3 高：18.7 脚：15.9

第20図

1	SI−02拡 埋土	鉢	内外面ミガキ，体部外面下位ケズリ，内面〜口縁部赤彩	小片	淡褐	
2	SI−02 埋土	甕	口縁部内外面ヨコナデ，体部外面ハケメ，内面ケズリ，頸部，内面一次調整ハケメ残す，底部アバタ状，体部外面スス	1/4	淡黄	口：15.0
3	SI−02拡 埋土	甕	口縁内外面ヨコナデ，体部内外面ハケメ	小片	赤橙	口：19.6
4	SI−02 埋土	甕	口縁部内外面ヨコナデ，体部内面ケズリ，口縁部外面スス	小片	淡黄	口：19.8
5	SI−02 埋土	甕	口頸部内外面ヨコナデ，口縁部外面厚いスス，蓋は端部上にのる	1/4	淡灰黄	口：18.7
6	SI−02拡 埋土	甕	〃	小片	淡灰黄	口：20.0
7	SI−02拡 土坑，埋土	台石	３面以上に平滑な使用痕	一部欠		残存 20.4×16.6 ×11.1
8	SK−26	甕	口縁部外面板状工具による7〜8条の擬凹線，体部外面ハケ，同内面ケズリ	1/5	淡褐	口：24.0
9	SK−28	甕	９条の擬凹線（２段），口縁部内面指圧痕残さない	1/6	灰黄	口：16.0
10	SK−28	甕	７条の擬凹線，口縁部内外面ヨコナデ	3/5	灰黄 淡黄	口：17.9

番号	遺構層位	器種	調　整　等	遺存	色調	法量（cm）
11	SK−28	甕	7条の擬凹線，口縁部内面指圧痕残さない	1/4	灰黄	口：20.8
12	SK−28	甕	7～8条の弱い擬凹線，口縁部内外面ヨコナデ，内面の指圧痕微かに残る	1/3	灰黄	口：21.4

第21図

1	SX−01	脚部	外面ミガキ，内面ヨコナデ，蓋転用で内面に厚いスス	1/4	灰黄	脚：18.2
2	SX−01	長頸壺	口縁部内外面ヨコナデ，頸部外面ハケメ，同内面不明	2/3	淡灰黄	口：16.0
3	SX−01	大型壺	体部外面上半ミガキ，同下半ハケメ後ミガキ，体部内面，上半ナデ，同下半（乾燥帯以下）ハケメ	1/2	淡黄橙	
4	SX−01	大型壺	頸部～体部外面ハケメ，頸部内面ハケメ後ヨコナデ，体部内面ナデ	1/2	灰黄	
5	SX−01	甕	口縁部10条の擬凹線，肩部クシ描波状文11条，ともにラフな施文，口縁部外面厚いスス，外蓋のる	1/4	灰黄	口：14.2
6	SX−01	脚（甕）	外面タタキ？ないしは粗いハケメ	3/4	灰黄	脚：6.0
7	SX−01	甕	口縁部内外面ヨコナデ，体部外面ハケメ，同内面ハケメ後ナデ，外蓋のる	1/2	淡灰黄	口：18.6 胴：23.3
8	SD−04	小型高杯か鉢	調整不明，突帯に刻み目，内外とも赤彩	小片	橙	口：15.9
9	47区 包含層	甕	体部～口縁部外面タタキ，内面ハケメ	小片	淡褐	

第22図

1	SX−02 灰白色シルト	長頸壺	口縁部内外面ヨコナデ，頸部外面ハケメ後ミガキ，同内面ハケメ，体部外面ハケメ後上半粗いミガキ，同内面ケズリ，底部外面ハケメ，頸部ヘラ描き文様と赤彩文様	3/4	灰白	口：13.5 高：31.4 胴：20.3 底：5.4
2	SX−02 灰白色シルト	甕	口縁部2条の凹線，口頸部内外面ヨコナデ，体部外面タタキ後ハケメ，同内面ハケメ後ケズリ，胴中位・頸部外面スス，胴中位表面剥離目立つ，底部周辺灰化，体部内面下位炭化物，底部内面は付着なし	ほぼ完	灰白 淡黄橙	口：14.0 高：20.4 胴：16.5 底：5.1
3	SX−02 灰白色シルト	甕	口頸部内外面ヨコナデ，体部内外面ハケメ，器表面の剥離激しい	1/2	淡黄橙	口：14.2 胴：15.6

第23図

1	SK−17 2,13,20	高杯	内外面ともハケメ後ミガキ	1/4	淡黄橙	口：21.7
2	SK−17 10	高杯	内外面ともハケメ後ミガキ	小片	淡黄	口：18.7
3	SK−17 10	高杯	内外面ともミガキ	小片	灰黄	
4	SK−17 25	高杯	外面ミガキ，内面ハケメ後ヨコナデ	小片	灰白	脚：18.0
5	SK−17 20	小型高杯？	外面雑なミガキ，内面ナデ，内外面とも赤彩	1/4	淡黄	口：9.5
6	SK−17 12	小型器台？	内外面ともハケメ後ミガキ	1/4	淡黄	口：9.0
7	SK−17 埋土	小型器台	外面ミガキ，内面ナデ	小片	淡黄	
8	SK−17 14	鉢	外面ハケメ後ミガキ，内面上半ヨコナデ，下半ナデ	1/5	黄灰	口：9.2

番号	遺構層位	器種	調　整　等	遺存	色調	法量（cm）
9	SK−17 10,11,13	鉢	口縁部内外ヨコナデ，他はナデ	1/4	淡黄橙	口：13.0
10	SK−17 7	壺	口頸部内外ヨコナデ，体部外面ナデ，同内面ハケメ後ナデ，外面体部中位以下スス付着	1/3	淡黄	胴：26.2
11	SK−17 3	甕	口頸部内外面ヨコナデ，体部外面ハケメ，同内面ケズリ	1/3	淡黄	口：18.0
12	SK−17 1	甕	〃	1/6	淡黄橙	口：19.5
13	SK−17 2,4	甕	口頸部内外ヨコナデ，体部内外ハケメ	3/5	淡橙	口：19.0
14	SK−17 1,9,18	甕	口頸部内外ヨコナデ，体部外面ハケメ，同内面ハケメ・ケズリ	2/3	淡黄	口：12.6 高：15.4
15	SK−17 15	甕	口頸部内外ヨコナデ，体部外面タタキ？同内面ハケメ	小片	灰白	口：17.0
16	SK−17 8,17,18,24	甕	口頸部内外ヨコナデ，体部外面ハケメ，同内面ケズリ・ハケメ	2/3	灰白 淡灰黄	口：13.2

第24図

1	SK−17 4,8,9,15,16 19,22	甕	口頸部内外ヨコナデ，体部外面ハケメ，同内面ケズリ	1/2	灰白	口：17.4 高：（26.0） 胴：20.0
2	SK−17 9,18,19,20, 25	甕	〃	1/3	淡黄	口：15.7 胴：21.2
3	SK−17 2	甕	口頸部内外ヨコナデ，体部外面タタキ後ケズリ，同内面ハケメ後ナデ	1/4	淡灰橙	
4	SK−17 1,12	甕	外面ハケメ，内面ケズリ後ナデ	1/5	灰黄	底：3.5
5	SK−17 3,10	甕	内外ともナデ，端部付近赤化，くの字口縁甕か	1/4	淡黄橙	脚：10.4
6	SK−18 （坑底）	台付鉢	内外ともミガキ，破片二次被熱，口縁部に赤彩痕	3/4	淡黄橙	口：20.0 杯部高：7.5
7	SK−18	鉢	口頸部内外ともミガキ，体部外面ミガキ，同内面ケズリ後ミガキ	1/3	黄橙	口：12.9
8	SK−18	壺	頸部外面ミガキ，同内面不明，体部内面ケズリ，破片被熱	1/4	淡黄橙	口：15.6
9	SK−18	壺	口頸部内外面ミガキ，外面スス，口縁部に籾圧痕２	1/4	淡黄橙	口：15.0

第25図

1	SK−18	甕	口頸部内外面ヨコナデ，体部外面ハケメ，同内面ケズリ	1/4	淡黄	口：14.8 胴：16.4
2	SK−18	甕	〃	1/6	淡黄	口：19.6
3	SK−18	甕	口縁部内外面とも板状工具による回転ナデ後ヨコナデ，体部外面ハケメ，同内面ケズリ，体部内面下半炭化物付着痕	3/4	淡黄橙	口：15.2 高：19.3 胴：16.4 底：1.3
4	SK−18	甕	口縁部外面板状工具による回転ナデ後ヨコナデ，体部外面ハケメ，同内面ケズリ	1/6	淡黄橙	口：28.0
5	SK−19 1	台付鉢	杯部内外面ミガキ，脚部外面ミガキ，同内面ヨコナデ，円孔６	3/4	淡橙	口：21.5 高：16.2 脚：13.5 杯部高：8.6
6	SK−19拡 (SD−25E)	小型壺	口頸部内外面ミガキ，外面・口頸部内面赤彩	1/4	淡黄	口：9.2

番号	遺構層位	器種	調　整　等	遺存	色調	法量（cm）
7	SK−19 6,8	装飾器台	内外面ミガキ	1/3	淡灰黄	受：9.8
8	SK−19 2,3,5	甕	口頸部内外面ヨコナデ，体部外面ハケメ，同内面ケズリ	ほぼ完	淡黄橙	口：20.3 胴：23.0
9	SK−19 4	甕	〃	1/4	淡黄橙	口：18.0
10	SK−19,3・6 SD−25E,6	甕	体部外面ハケメ，同内面ケズリ	1/4	淡黄	
11	SK−20	甕	口頸部内外面ヨコナデ	1/5	淡黄	口：18.6

第26図

1	SD−25E 3・4	高杯	外面ハケメ後ミガキ，内面ミガキ	1/3	淡黄橙	口：24.8
2	SD−25E 3,同W	高杯	〃，雑な作り	1/4	淡黄	
3	SD−25W	壺	口頸部内外面ミガキ，体部内面ケズリ	1/4	淡黄橙	口：12.7
4	SD−25W 2	甕	口頸部内外面ヨコナデ，体部外面ハケメ，同内面ケズリ	1/6	淡黄	口：18.0
5	SD−25E 5	甕	〃	1/3	淡黄	口：20.6
6	SD−25E 5,北スミ	甕	〃	3/4	淡黄橙	口：17.4 胴：22.0
7	SD−25E 北スミ	甕	〃	1/6	黄灰	口：（18.5）
8	SD−25E,4 SI−01	甕	〃	小片	淡黄	口：（35）
9	SD−25E 南側	砥石	全面に使用痕，軽石製（水に浮く）	一部欠	灰白	重：3.7g 2.9×2.9×2.1
10	SD−25E 上面	小型高杯 ？	内面ミガキ，外面平行沈線の区画間に貝殻状の刺突	1/4	淡黄橙	口：11.4
11	SD−25E 上面	鉢	外面ハケメ後ナデ，内面ハケメ	1/3	淡黄橙	口：11.2 高：5.3
12	SD−25E 上面	壺	内外面ミガキ，口縁端部竹管文・赤彩，内面櫛状具による綾杉状の刺突文	小片	淡黄橙	口：（18）
13	SK−22 1層	環状石斧	砂岩	1/2	灰黄	8.5×2.1 重：120.8g

第27図

1	SK−22	高杯	内外面ともミガキ	小片	淡黄橙	口：17.8
2	SK−22拡	高杯	内外面ともミガキ，口縁端部面取り，一次調整粗いハケメ	1/6	淡黄	口：17.5
3	SK−22拡 2層底	高杯	〃	ほぼ完	淡黄	口：19.0
4	SK−22	高杯	外面ミガキ，内面ハケメ，脚部内湾，3と同一個体か	小片	淡黄灰	脚：（13）
5	SK−22	高杯	外面ミガキ，内面ハケメ後ヨコナデ，脚部内湾	小片	灰白	
6	SK−22拡	小型高杯	内外面ともミガキ，器肉薄い	1/4	灰黄	口：10.0
7	SK−22拡 2層底	鉢	体部外面ハケメ，同内面ヨコナデ	1/3	淡黄	口：8.5
8	SK−22	直口壺	外面ミガキ，頸部〜肩部内面ミガキ，体部内面ヨコナデ	1/4	淡黄	
9	SK22 2層底	壺	外面ミガキ，体部内面中位以上ナデ，同下位〜底部粗いハケメ，外面に厚いスス	1/3	灰黄	胴：16.5 底：3.5

番号	遺構層位	器種	調　整　等	遺存	色調	法量（cm）
10	SK−22	壺	口頸部内外面ヨコナデ，体部外面ハケメ後ナデ，同内面ナデ	1/3	淡黄	口：18.0
11	SK−22拡 2層底	甕	口縁部内外面ヨコナデ，受口状口縁	小片	灰黄	口：（13.5）
12	SK−22	甕	口頸部内外面ヨコナデ，体部内面ケズリ	小片	淡黄橙	口：（14）
13	SK−22 1層	甕	一次調整は内外とも粗いハケメ，口頸部内外面ヨコナデ，体部外面ナデ，同内面ケズリ	1/3	淡黄	口：13.6
14	SK−22拡 2層底	甕	口頸部内外面ヨコナデ，体部外面粗いハケメ，下位ケズリ，体部内面上半工具によるナデ，同下半ケズリ	ほぼ完	淡黄	口：13.6 胴：13.1
15	SK−22	甕	体部外面ハケメ・ケズリ，同内面ハケメ・ナデ，口頸部外面ケズリ後ヨコナデ，雑な作り	1/6	淡黄	口：15.0
16	SK−22 2層底	甕	口縁〜体部外面ハケメ，口縁部内面ナデ，体部内面ハケメ，口縁端部面取り	1/4	灰黄	口：19.2
17	SK−22拡 2層底	甕？	内外面とも粗いハケメ，乾燥帯付近は内外面とも細かいケズリ	ほぼ完	淡黄	底：3.6
18	SK−22	脚台 （甕）	外面粗いハケメ，内面ナデ，端部肥厚	3/4	灰黄	脚：7.6
19	SK−22	脚台	外面粗いハケメ後ヨコナデ・ナデ，内面ヨコナデ・ナデ，内底面ミガキ？	1/4	淡黄	脚：6.4
20	SK−22	甕	外面タタキ後ハケメ，内面ナデ	小片	淡黄	
21	SK−22 1層	甕	肩部外面タタキ後ヨコナデ，同内面ケズリ	小片	淡黄	
22	SK−22 1層	甕	外面タタキ，内面ケズリ	小片	淡黄	
23	SK−22拡	甕	外面タタキ，内面ハケメ，口縁端部面取り，作り雑	小片	淡黄褐	

第28図

1	SK−23	高杯	内外面ともミガキ	1/4	橙	口：23.6
2	SK−23	器台	外面ミガキ，受部内面ミガキ，脚部内面ハケメ	2/3	淡橙	口：21.2
3	SK−23	鉢	外面ハケメ後ナデ？内面ケズリ	ほぼ完	淡黄	脚：8.3
4	SD−27	壺	外面ミガキ，口頸部内面ヨコナデ，体部内面ナデ	ほぼ完	淡黄 灰黄	
5	SD−29	高杯	外面ミガキ，内面ハケメ後ヨコナデ	ほぼ完	灰黄	
6	SD−29	鉢	口頸部内外面ヨコナデ，体部内外面ケズリ	1/2	灰白	口：9.6 高：8.8
7	SD−29	壺	内外面ともミガキ	2/3	淡黄	口：9.6 高：3.4
8	SD−31	壺	口頸部内外面ミガキ，頸部内面一次調整ハケメ残す	ほぼ完	淡黄	口：12.4
9	SD−31	無頸壺	外面ミガキ，口縁部内面ヨコナデ，体部内面ケズリ，外面スス付着	1/4	灰黄	口：12.2
10	SD−28	高杯	内外面ともミガキ	小片	淡黄	口：27.0
11	SD−28	甕	口頸部内外面ヨコナデ，体部外面ハケメ，同内面ケズリ	1/4	淡黄	口：31.5

第29図

1	P−32	高杯	内外面ともミガキ	1/2	淡黄	口：25.0
2	54区 下層	小型壺	内外面ともミガキ，体部内面一次調整ケズリ，頸部に対をなす円孔2	1/2	灰白	口：11.5 胴：13.0
3	54区 下層	甕	口頸部内外面ヨコナデ，体部外面タタキ後ハケメ，同内面ハケメ後上半部ナデ	3/4	灰白	口：18.0 胴：20.5
4	48〜49区	小型壺	S字スタンプ2種	小片	灰黄	
5	SD−31	小型高杯	内外面ともミガキ	ほぼ完	淡黄	

遺物観察表について

番　　号：挿図内の番号を記入。

遺構層位：上段に遺構外、下段に層位を記入した。分層できない遺構や層位不明のものは「埋土」ないしは無記入とした。下段の番号は遺物の取り上げ番号で、挿図中の遺物に付した番号に一致する。「拡」は拡張区の略である。別遺構間で接合したものすべてを記入した。

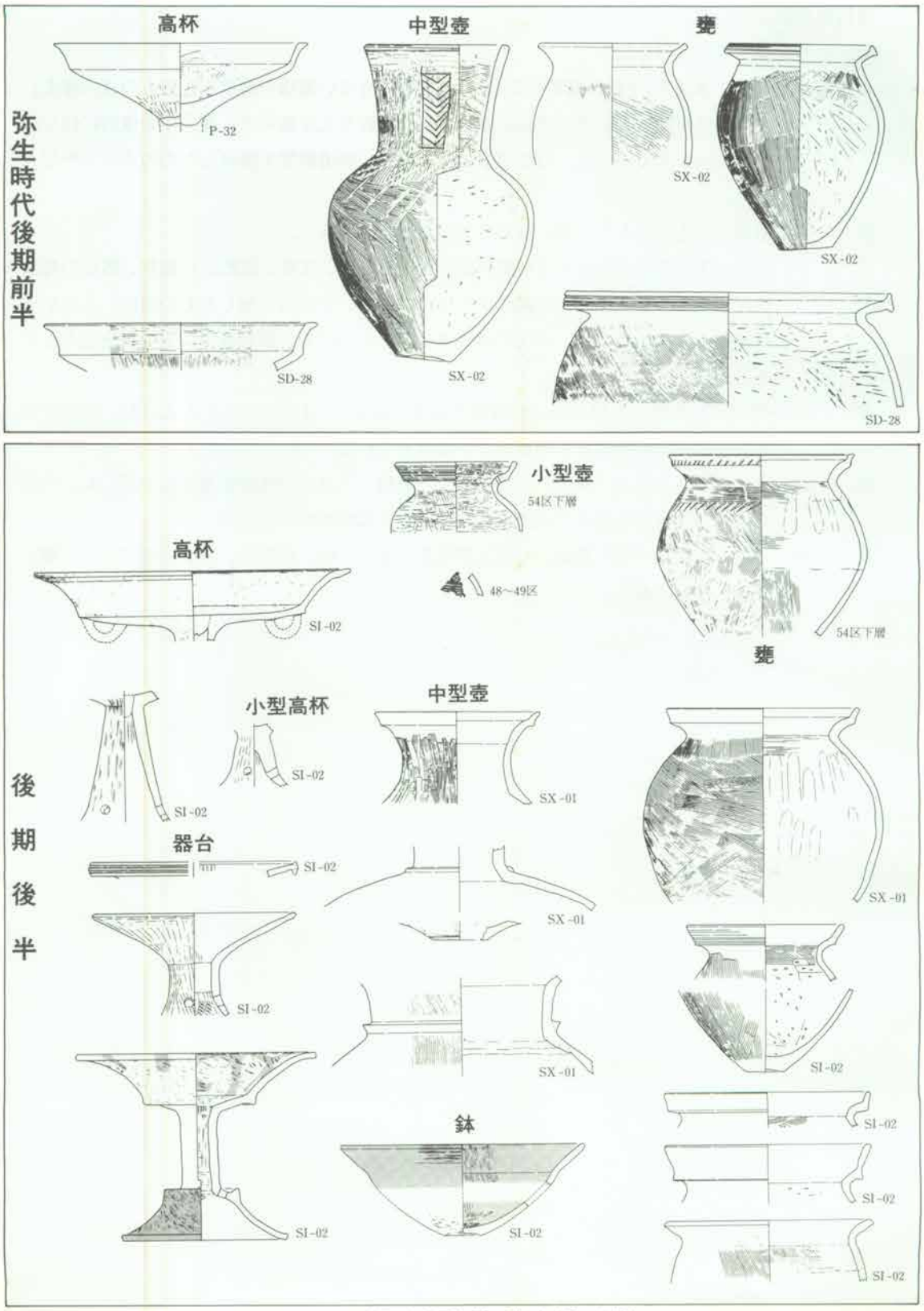
器　　種：器種のみを記入した。細かな形式分類は行っていない。

調 整 等：確認できる器面の調整を古い順に記した。その他、文様、成形、付着物、器形の特徴などを記入した。赤彩は挿図にアミをかけたが、文様的に施したものの内、それが不明確なものについては、挿図では全体にアミをかけて、観察表中にその旨を記入してある。

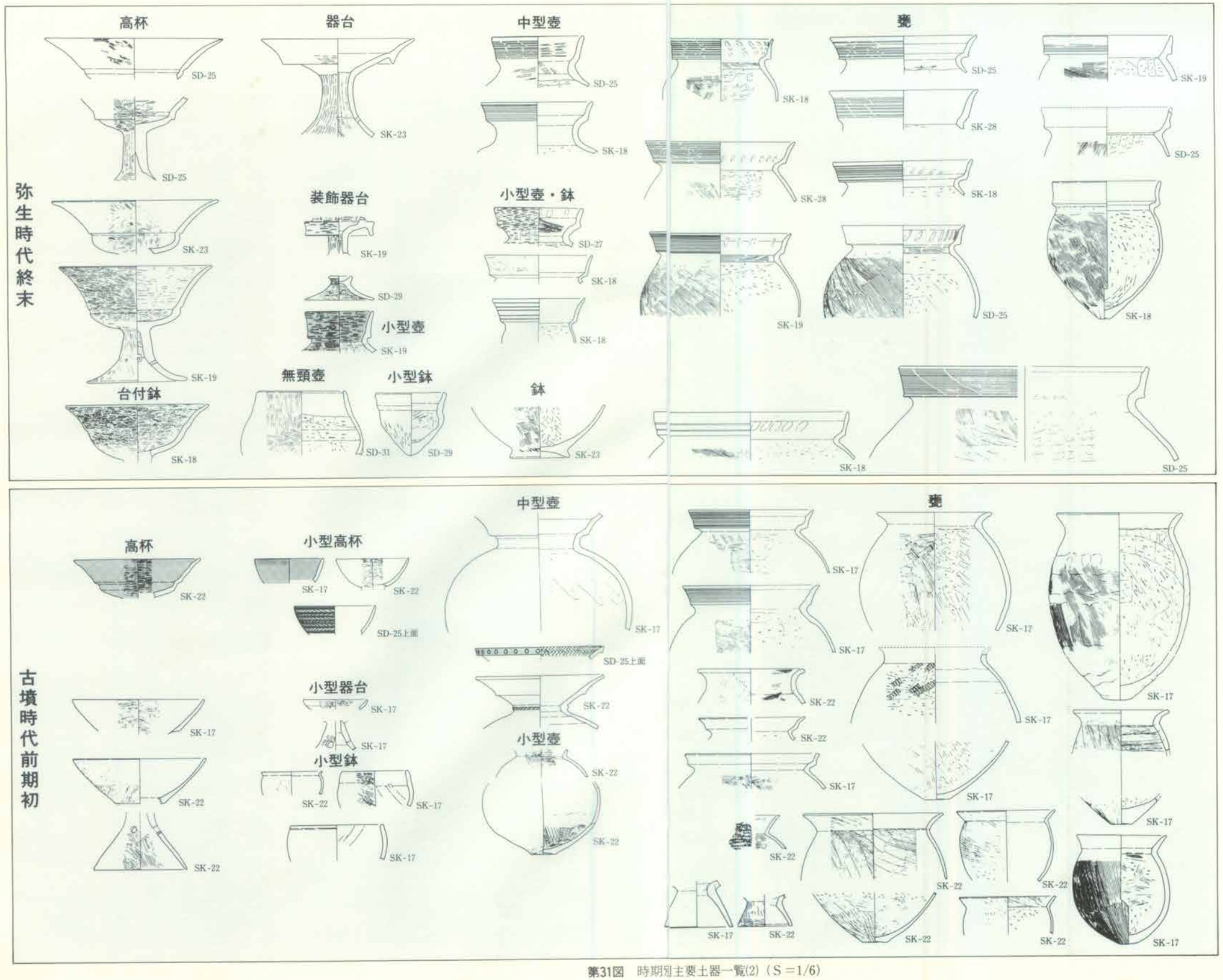
遺　　存：図示部分のおよそ何分の一が残存するかで記入し、1/6以下は小片とした。未接合でも同一個体と判断したものはその中に含めている。

色　　調：「灰白」「淡黄」「灰黄」「淡黄橙」「黄橙」「橙」の６色を基準に分類した。外面の火回りの良好な部位の色調を記入するように努めた。

法　　量：「口」口径、「高」器高、「胴」胴部最大径、「脚」脚部径、「底」底部径、「重」重量、の略である。



第30図　時期別主要土器一覧(1)（S＝1/6）



第31図　時期別主要土器一覧(2)（S＝1/6）

第6章　ま　と　め

倉部出戸遺跡は弥生時代後期～中世の複合遺跡である。最後に今回の調査で判明した各時期の成果をまとめておきたい。

弥生時代後期前半　集落の出現時期で、平地式住居跡かとみられる礎板柱穴群が2箇所以上ある。一括土器を出土した45区ＳＸ－02の東側に集落跡が広がっていたと考えられる。

弥生時代後期後半　極早い時期に集落一帯が冠水したとみられ灰白色シルト層が後期前半の遺構面を覆う。57区では同層の下面で噴砂が検出されており、洪水とともに、地震等の災害などもあった可能性がある。竪穴住居跡ＳＩ－02やＳＸ－01が代表的な遺構で、38～44区付近の微高地西辺部（第5図下段）に集落が形成されたと考えられ、ＳＩ－02では玉作りを行っている。53～54区付近にも遺物は少量出土しており、東側にも住居の存在した可能性はある。

弥生時代後期末　本遺跡が最も規模を拡大する時期で、遺物は38～59区と最も広範に出土した。中心はＳＸ－02の鞍部の東側で、46～51区の微高地中央部に遺構が集中する。代表的遺構はＳＫ－18・19、ＳＤ－25など土坑や溝が多く、明確な住居跡はないが、ＳＩ－01はその可能性があって、周辺の遺物の出土状態から考えても集落域と推定できる。本調査区の南側に住居跡の存在を想定しておきたい。

古墳時代前期初　遺物は微高地中央部で、弥生時代後期末の領域とほぼ重複して出土したが、純粋な遺構はＳＫ－17・22がある程度で少ない。集落域とみられるが、前段階より遺物量は少なく、本調査区付近はその縁辺部と推定される。

古代　奈良時代末～平安時代初頭頃の遺物が少量出土している。43区付近に小規模な建物が存在した可能性がある。

中世　建物跡等の遺構は確認できなかったが、40、41区の旧河道内から15～16世紀の遺物が出土した。旧河道は北東の屋越川方向から流れるもので、南西に存在が想定される倉部館跡へ続くものと考えられる。倉部館跡の存続年代は不詳であるが、本遺構から出土した遺物はその年代の一端を示すものであろう。13～21区の稲株状の遺構は中世～近世の水田の可能性がある。

以上、本遺跡は中央部微高地が集落域として利用される弥生時代後期前半～古墳時代前期初頭が主要時期といえる。一部分のみの調査のため、集落が断続的に営まれたのか、連綿と継続するのか、各時期の集落規模等、その性格は不明であるが、手取川扇状地扇端部に散在する同時期の集落の一端を窺うことができたと思う。本遺跡の南西約1kmには、弥生時代後期後半～古墳時代前期初頭にかけて累世的に墓域を営んだとみられる一塚遺跡がある。弥生時代後期末には四隅突出型墳丘墓、古墳時代前期初頭には突出部をもつ墳丘墓が営造されており、当地の中核的墓域とみられている。扇端部の集落群のあり方が「母村的」集落－「衛星的」集落の関係で理解できるのか、一塚遺跡の墳墓群の造営基盤がどの程度の集落を包括するものか、など当該期の集落構造をめぐる課題は多い。県営圃場整備事業に係る発掘調査は、排水路敷のみを対象とした幅2mの線的なものであったが、その対象とした範囲は極めて広い。それらの成果は今後漸次報告されるであろうが、前記の問題を考える上で本報告がその一助になれば幸いである。

写真図版

（昭和22年 撮影）

倉部出戸遺跡俯瞰（南から）

倉部川と屋越川の河口付近（倉部町上空から）

調査区遠景（西から）

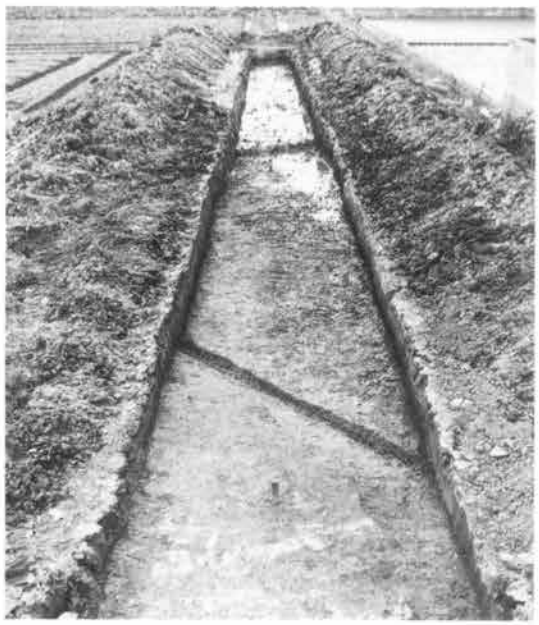
表土除去作業（東から）

11区～14区付近湛水（西から）

23区～29区（西から）

39区以西（東から）

47区以西（東から）



38区ＳＸ－01（東から）

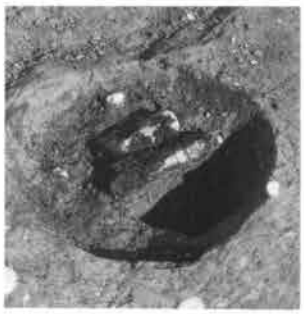
45区付近調査風景（東から）

34区沼地（西から）

42区ＳＩ－02（東から）

40・41区中近世旧河道（西から）

42区ＳＩ－02全景（北東から）

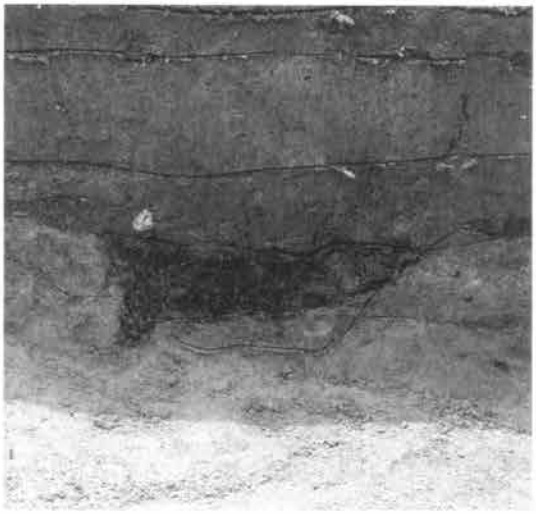


北側柱穴

遺物出土状態（東から）

遺物出土状態（東から）

ＳＩ－02作業風景



炉跡断面（北から）

45・46区ＳＸ－02（西から）

同上　遺物出土状態

同上　遺物出土状態

52区以東（西から）

53区以西（東から）

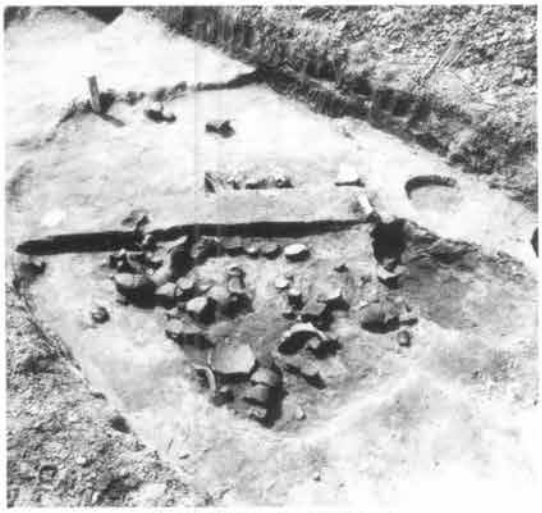
50区ＳＩ－01検出状況（東から）

ＳＩ－01完掘（東から）

52区礎板柱穴群（東から）

ＳＤ－25、ＳＫ－19（東から）

52区以西
手前がＳＫ－22
（東から）



48・49区ＳＫ－47（南東から）

52区ＳＫ－22（北から）

ＳＫ－17遺物出土状態（南から）

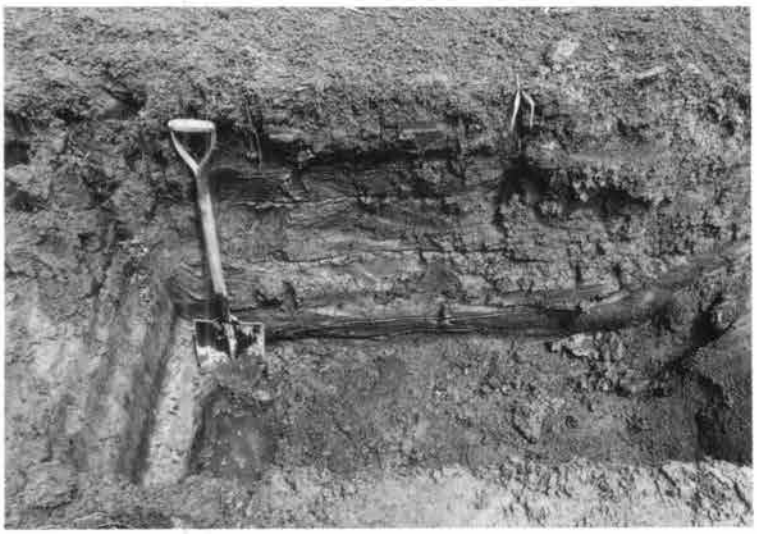
ＳＫ－19遺物出土状態（南から）

ＳＫ－19作業風景

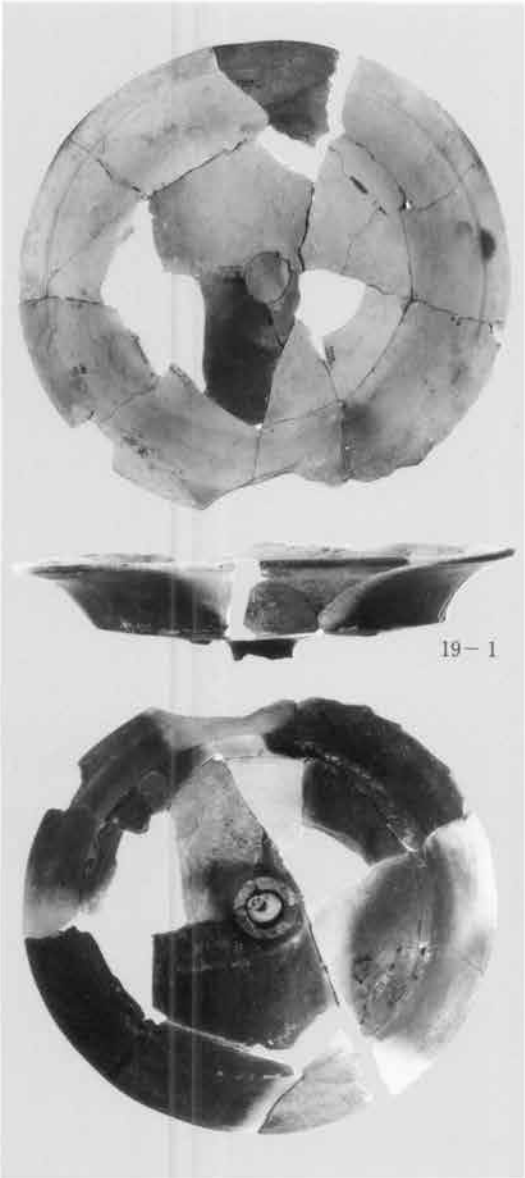
第1次調査
竹松遺跡

重機による表土除去作業
（北から）

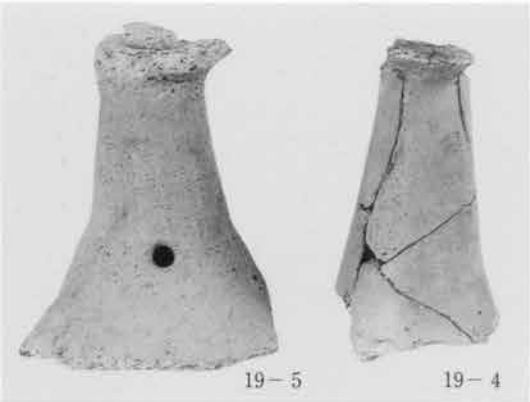
調査状況（南から）



土層観察状況

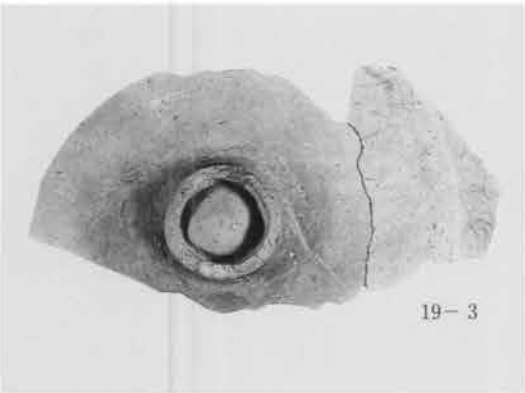


19－1



19－5　19－4

19－10



19－3

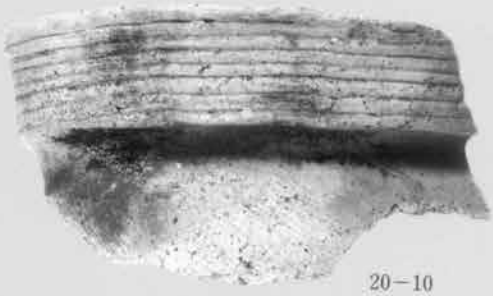
19－11

19－11

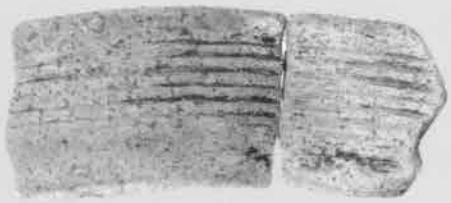
20－7

S I －02
台石

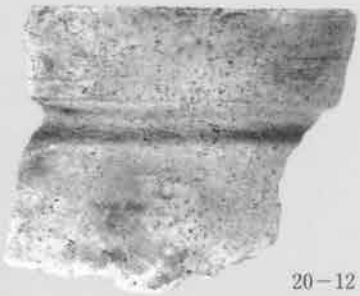
20－9



20－10



20－11



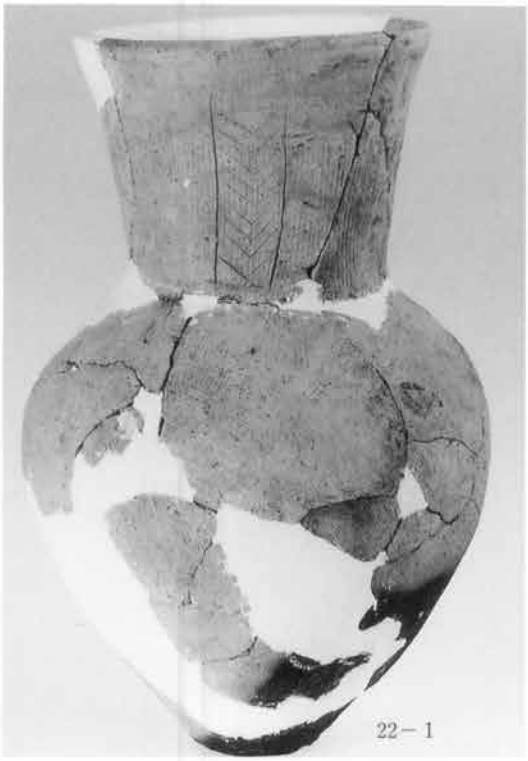
20－12

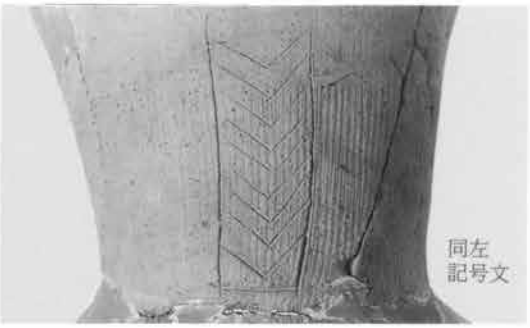
21－2

21－7

21－5

21－9


22－1

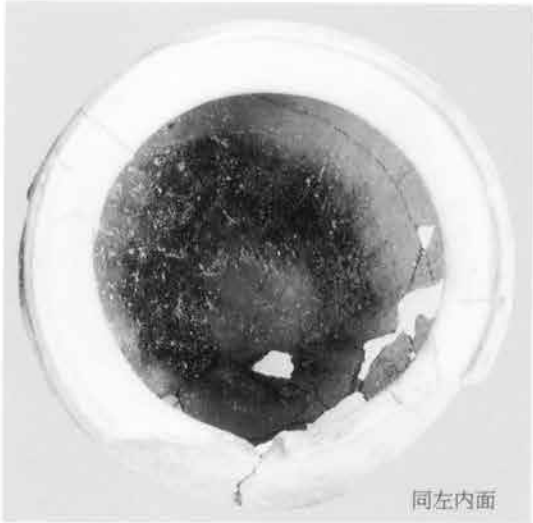

同左
記号文

同左
赤彩文

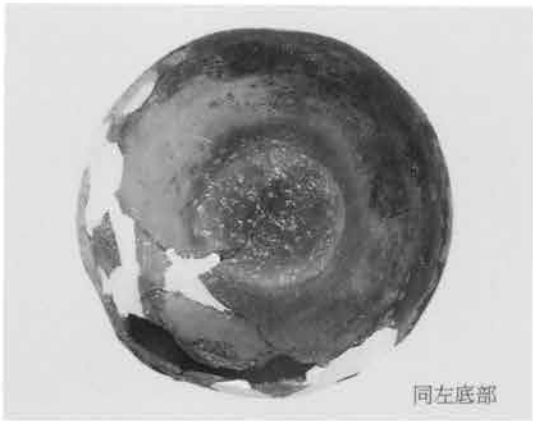
同上底部

同左胴部

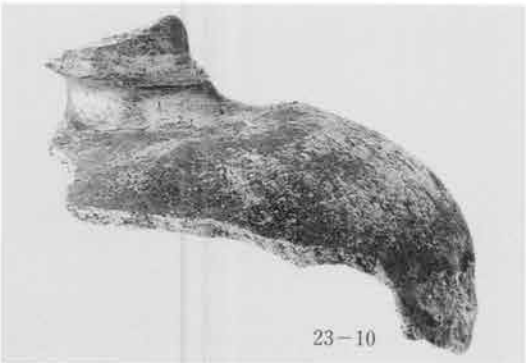
22－2


同左内面

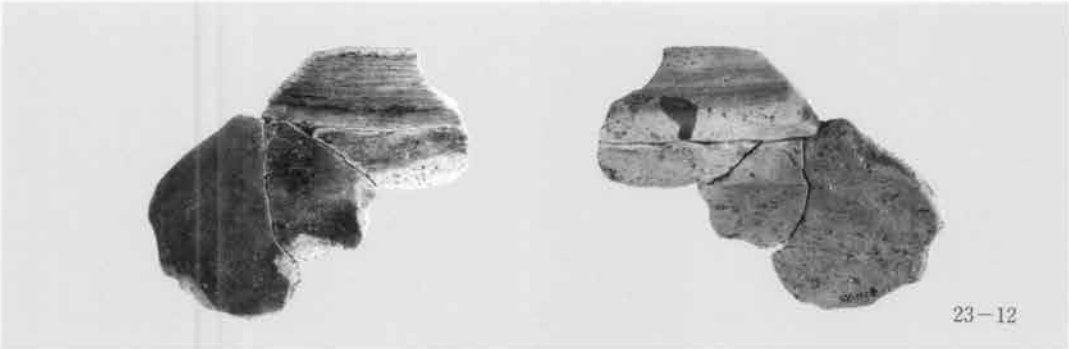
同上口頸部


同左底部

23－9　23－8


23－10

24－1


23－12

23－11

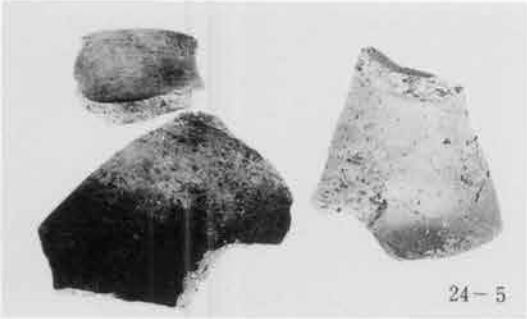
23－13

23－14

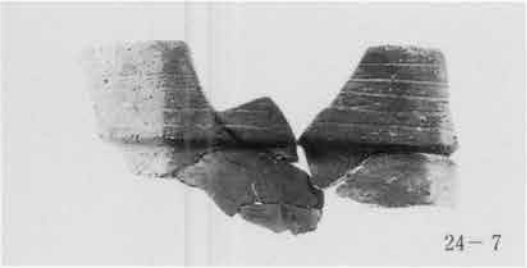
24－2

23－16

24－3


24－5

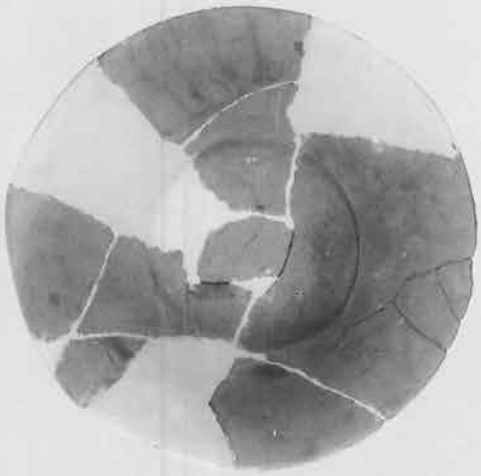
24－6


24－7

25－1

25－6

25－3

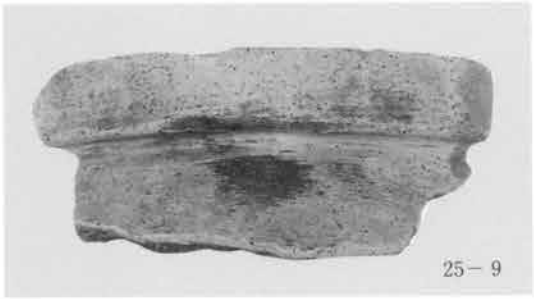


25－5

25－7

25－8

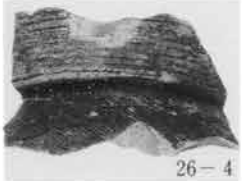
同上



25－9

26－2

26－3

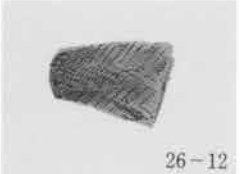

26－4

26－5

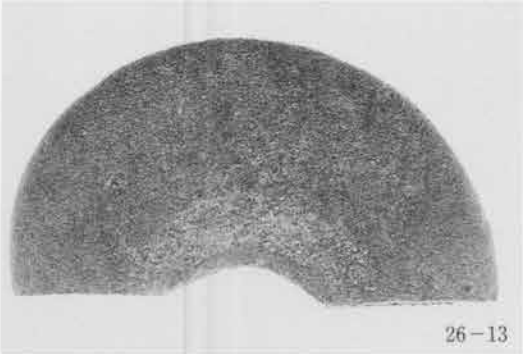
26－6

26－8

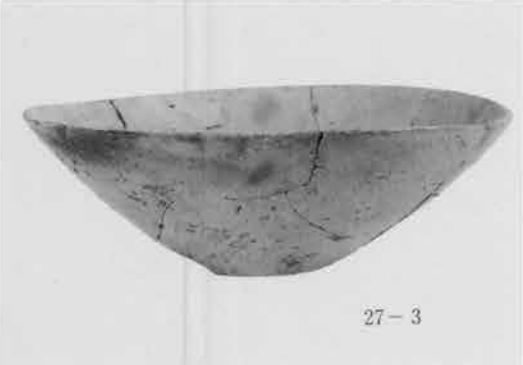
26－10


26－12

同上


26－13

26－9


27－3

同左

28－2

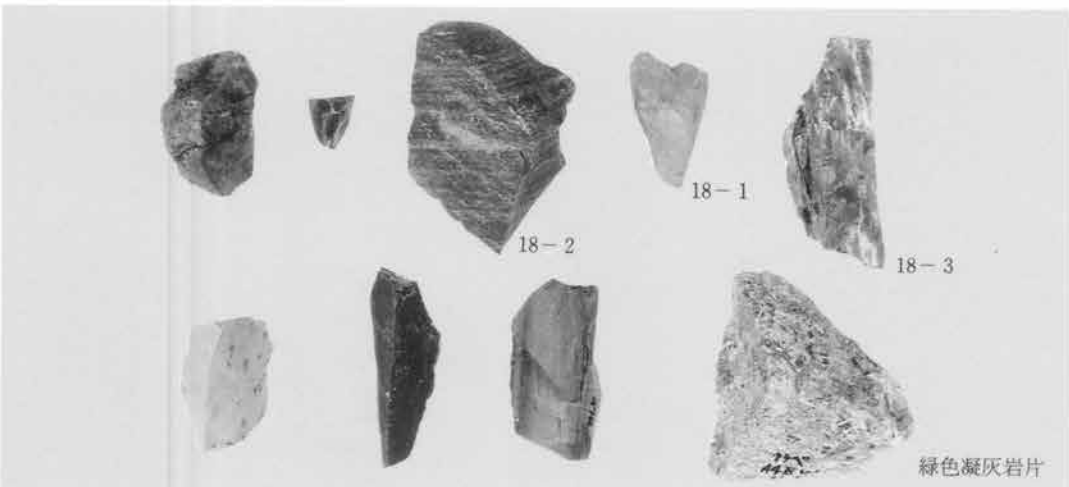
28－3

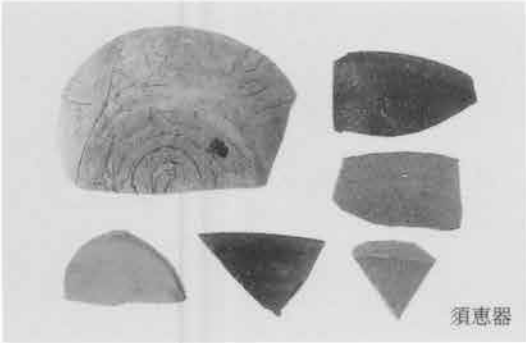
28－4

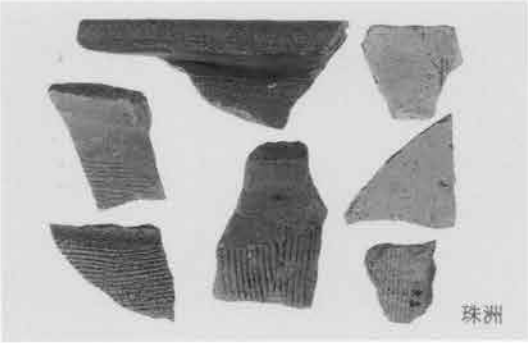
28－6　28－7

29－3

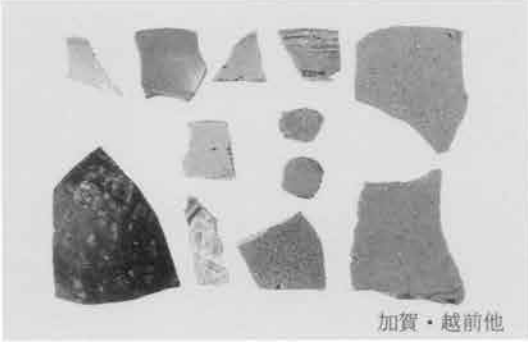
28－11


18－1　18－2　18－3　緑色凝灰岩片


須恵器


珠洲

土錘


加賀・越前他

倉　　部

平成2年3月20日印刷
平成2年3月31日発行

編集・発行　石川県立埋蔵文化財センター
石川県金沢市米泉町4丁目133番地
〒921　電話（0762）43－7692番(代)

印　　刷　中川大正印刷株式会社